
ロークアットは二度笑う。

竹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロークアットは一度笑う。

【NNコード】

N9874X

【作者名】

竹

【あらすじ】

(* 谷) > 入りや

てふてふと、彼を取り巻く人々のショートストーリー。

大谷さん中心にちょこちょこ書いてます。連載とは名ばかりで短編集と化しました。愛し愛され恋い恋われ…とにかく大谷さんです。修道やらBで始まりしで終わるのが平気な御方はご賞味あれ。追記：リクエスト隨時受け付けてます。

パー・マグラネットに囁いて。

大谷さんとみんなでキスネタ

髪

豊臣秀吉 × 大谷吉継

「髪にも香を染み込ませたのか?」（貴様の香りが離れない）

髪（思慕）

額

竹中半兵衛 × 大谷吉継

「少しば休んで。ね?」（君も幸せになれるんだよ）

額（祝福）

瞼

真田幸村 × 大谷吉継

「大谷殿は石田殿のことによく見て居られるでござる。」（某のことは見ないのに）

瞼（憧憬）

耳

松永久秀 × 大谷吉継

「卿は、自分の幸せを願う」とはないのかね?」（私が叶えてあげようつか）

耳（誘惑）

鼻梁

お市 × 大谷吉継

「蝶々さん、かわいい…」（市の、もの…ふふ）

鼻梁（愛玩）

頬

前田利家 × 大谷吉継

「「Jんなと「Jにまつの飯が!」（貴殿と食べる飯はつまJ）

頬（親愛）

頬2

まつ × 大谷吉継

「あれ、「J飯粒が。」（貴方様の笑顔でまつもお腹いっぴいになる

ので「いやこます」

頬2（満足感）

唇

（鏡の中の）大谷吉継 × 大谷吉継

「ヒ、ヒ…ぬしなぞ、誰も愛さぬ。」（泣くなナクナ、我が慰めて
やろ）

唇（愛情）

喉

織田信長 × 大谷吉継

「我以外と交わす言葉が必要か？」（いつそこのまま食い千切つて
しまいたい）

喉（欲求）

首筋

伊達政宗 × 大谷吉継

「蝶と竜が、悪くねえ。」（今からお前は俺のもんだ、you s
ee?）

首筋（執着）

背中

片倉小十郎 × 大谷吉継

「次逢つたら…いや、良い。」（今はこれが夢でないと思いたい）

背中（確認）

胸

石田三成 × 大谷吉継

「刑部、どこにも行くな。」（離れるな、ずっとだ。）この先未来永劫、私は貴様と共に在る（）

胸（所有）

腕

前田慶次 × 大谷吉継

「アンタが恋してる話は、あんまり聞きたくないねえんだ。」（しがみついて格好悪くても、アンタが好きだと言いたかった）

腕（恋慕）

手首

長曾我部元親 × 大谷吉継

「海賊つてなあ欲しいもんは力尽くで手に入れるつてもんよ」（アンタの過去も未来も俺が奪う）

手首（欲望）

手の甲

風魔小太郎 × 大谷吉継

「…」（お疲れ様です）

手の甲（敬愛）

掌

徳川家康 × 大谷吉継

「刑部も天下も三成も、なんて…ワシは虫が良すぎるな。」（今だけその手の中で泣かせて）

掌（懇願）

指尖

雑賀孫市 × 大谷吉継

「手まで動かなくなつた訳ではあるまい？」（この手が守り抜いてきたものは一体いくつあるのか）

指先（賞賛）

腹

本多忠勝×大谷吉継

「ギュイーン。」（もつ痛くはないのだらうか…。くすぐったそうに頭を撫でられた）

腹（回帰）

腰

黒田官兵衛×大谷吉継

「どうだ刑部！これで逃げられねえだらう？」（枷の代わりに小生が捕まえててやる）

腰（束縛）

腿

毛利元就×大谷吉継

「貴様は我の蝶よ。」（このまま籠に閉じ込められたなら…）

腿（支配）

脛

猿飛佐助 × 大谷吉継

「仰せのままに、つてね。」（アンタのために、動いてあげる）

脛（服従）

足の甲

小早川秀秋 × 大谷吉継

「僕は、貴方の道具だよ。」（愛じやないことくらい、分かっているつもり）

足の甲（奴隸）

爪先

天海 × 大谷吉継

「ふふ… 貴方のことは、全て分かっていますよ。」（私の全て、ああ刈り取ってしまうのが惜しい）

爪先（崇拜）

■おまけ

大谷さんとみんなでキスネタ（入らなかつた人たち版）

額 武田信玄 × 大谷吉継

「むうん、ちと軽すぎではないのか？」（幸にも不幸にも押し潰されぬようコワシが抱えよう）

額（祝福）

瞼 北条氏政 × 大谷吉継

「ひょっひょ！睫毛がついていたのじゃ」（今ばかりは風魔も呼べぬのう）

瞼（憧憬）

耳

明智光秀 × 大谷吉継

「私と共に来ませんか？」（地獄の果てまで）（案内しますよ）

耳（誘惑）

鼻梁

島津義弘 × 大谷吉継

「おまはんは、むぞらしかね」（そしてぐらしご）

鼻梁（愛玩）

頬

鶴姫 × 大谷吉継

「ほらほら、もっと一コ芝して下さい」（表情一つでも未来は
変わるんです）

頬（親愛）

頬2

いつき × 大谷吉継

「おめれに、頼つても良いんだべか?」（その腕の中は安心できる
だ）

頬2（満足感）

喉

宮本武蔵 × 大谷吉継

「なあ、おれをまと勝負しろよ。」（勝つたらそん時は…）

喉（欲求）

首筋

今川義元×大谷吉継

「不思議でおじやる…」（魔の素顔を晒しても、良かと思った）

首筋（執着）

背中

最上義光×大谷吉継

「我輩は、貴殿の名を呼ぶよ。」（吉継、吉継…間違えよつもないね）

背中（確認）

胸

上杉謙信×大谷吉継

「うつへしあひゅう…」（たいへいのよがおどすれたら、かく）な
ぞこ

胸（所有）

手首

大友宗麟 × 大谷吉継

「貴方も愛を知るべきです。」（僕の愛を受け入れて）

手首（欲望）

手の甲

浅井長政 × 大谷吉継

「市が世話になつてゐるようだ。」（この者に幸多からんことを）

手の甲（敬愛）

掌

ねね × 大谷吉継

「秀吉さまを、お願いね。」（寂しがりやで意地つ張りなのは貴方と一緒）

掌（懇願）

指先

かすが × 大谷吉継

「謙信さまがお前のことを聞いて居られた。」（誰よりも幸せにな
るべき者と）

指先
(賞賛)

■おまつせッフ。(後書き)

地方武将…すまん、キャラが分からぬ。

最後担当のかすがちゃんでしたが、
あれは私の願いでもあります。

みんなでもみくちゃに遊んであげたいな。

島津さんの方言について

むわいしかね 可愛い
ぐうじい 可哀想だ

間違っていたらーーー報下せー。

パンプキンの裏面。

大谷さんとお菓子と悪戯

伊達政宗の場合

「Trick or treat?」（菓子が無いならアンタを食
い）

真田幸村の場合

「ど、どつづく、あ、あ…鳥?」（よくは分からぬが、団子を貰え
たでござんな）

徳川家康の場合

「トリック・アンド・トロート」（ワシはお菓子と刑部が欲しい）

石田三成の場合

「刑部」（菓子はござらん貴様を寄りせ）

長曾我部元親の場合

「Trick or treat?」（あひつ、ちよ、豆は投げんじやねえつー）

毛利元就の場合

「... Trick or treat」（餅か。悪くないな）

前田慶次の場合

「えーっと、Trick or treat?」（え、もひ食ひち
まつた?... も、れは食べても良こいつことこ...）

黒田官兵衛の場合

「Trick or keyだ! ひだ刑部、小生は賢いだひつ。
?」（鍵がなきやお前さん」と食つまひや）

パンプキンの愛憎。 (後書き)

みつせん、せめてTrick or treatは言おう……

『やがてもかくストロベリー。』

三成×大谷

「こいつの！」と窒息しろオオオオオオ…。」

耳をつんざくよつた怒声が聞こえ、私はまたか、と肩を竦めた。

家康との対立から、三成はやけに怒りっぽくなつたと感づ。

無論、前々から神経質なところがあつたのは分かつてゐるが、

それにしたつて怒るおじい…。

『いつの間に莫迦を通り越した？』

『刀狩りだ。利き腕と共に刃を差し出せ。』

『いいだらう… 気の済むまで斬滅してやるー。』

探せばこぐらでも出て来る。

「はあ。」

小さく吐いた溜息は三成の「家康ウ……」にかかり逆されていく。

「三成、三成。」

くさり、三成の袖を引っ張つて我に気付かせた。

「こえやう……やひつた刑部。」

袖にやつたのは別の手を三成の頬に置き、

「……我を窒息させてみせ。」

そう言った。

しづらじゆくのよつと固まつていた三成が、やつくつと我に覆つて被さる。

本当に窒息するのではないかと思ひ程の長い間、唇を重ね、酸素を奪ふ口こ、舌を絡める。

苦しきなつて逃げよつてしま、三成の手がそれを食してせなんだ。

飲み込めなかつた唾液がつゝ、と糸を引く。

口を離して、浅く息を吸つて、今度は触れるだけの口吸いをした。

(…家康に妬いたのか?)

(ハハ…わあて、我にほんと分からぬな。)

タンジョリンは疊らない。

黒田 × 大谷

『君たちは本当に仲が良いね。』

銀髪をなびかせた男がそう言つたのは、いつのことだったか。

少なくとも、小生に枷が付く前だ。

『ケツ！刑部と仲良しによしに見えるか？』

投げつけられた泥団子を払い落としながらそつ答えた。

仲が良いなんて、どう見たって考えられないだらつ。

元服も済ませた野郎同士に、ケンカするほど、
なんて言葉は似つかわしくない。

刑部はただ小生を苛めて楽しんでやがるんだ。

『嫌いじゃないでしょ』

その言葉には、なんと答えたのか。

もつと思ひに出せなくなつていた。

「暗、憂い事か？」

鉄球に腰掛けっていた小生を数珠ですつ転ばせた刑部は、ケタケタと笑つていた。

「ああそりだよ。なんでお前さんはそんなに素直じやないのかと思つてね！」

あの時のように土に塗れて、器皿に入った砂を歯と井に吐き出した。

「素直も何も、ぬしが嫌いだからよ。」

「小生だつてお前さんなんか嫌いだね。」

「トウゼンである、病悪いを好みとすれば、ぬしが性癖なんかと疑いたくなるわ。」

「いつも考え方が嫌いだつて言つてこるんだ。」

「どうりでよ嫌いなのであるべ。」

「あー嫌いだね！」

『嫌いだつたら、わざわざ構つたりしないだろ？·愛情の裏返しは無関心だよ。』

『好いているから、お互に嫌いだなんて言い合えるんだ。』

『少し、羨ましいよ。』

半兵衛の言つ事は、知性派の小生にも理解し難かつた。

けれど、

「嫌いよ。」

「嫌いだ。」

やつぱり合えなくなると思と、チクリと胸が痛んだ。

泣き虫マニア。

黒田×大谷

「ヒヒ、ヒッ……」

愉快で仕方が無いと言ひよつて、刑部は笑う。

だが、こんな笑い方をしてる時、あいつは不機嫌だ。

障子一枚で仕切られた部屋の外と中。

城の離れ、仕事以外で訪れる者の少ない部屋。

そこで刑部は笑う。

(寂しいのか)

よく、そう思つ。

刑部がああやつて一人閉じ籠つて笑う時、三成は必ずと言つて良い程、居ない。

わざわざ居ない時を狙つて笑うものだから、てっきり居なくなつて嬉しいのかと思つたや、

実は逆だ。

(寂しくて)

寂しくて寂しくて、そんな自分が滑稽で、笑うんだろう。

「ふ、ふ……つ、ひ……」

そうしてもっと寂しくなって、

「……暗、こつまでそこそこ頑張つもりか。」

小生に当たり散らすんだろう?

カタ、リ

やや滑りの悪い障子を開いて、枷のはまつた腕の中に刑部を閉じ込める。

「お前さん、泣き方を間違えてるよ。」

引きつり笑いが固まって、また、始まつた。

けれど、刑部は小生の腕から逃げ出さない。

「ヒ、ヒ…暗あ、我が泣いてると、どう見ても笑つておひ。」

確かに一滴の雫すら流れた様子はないし、目だつて赤くもなんともない。

でもそれは、刑部が上手く泣けないから。

いや、ずっと泣き続けて涙が枯れたのか？

刑部を抱き締める腕に、少しだけ力を込めた。

このままもつと力を込めれば、こいつの細っこい体なんてポキリといっ飛びます。

ケタケタと笑つていた刑部の臉に、

ちう

と、小さな顔をたてて顎を落とした。

「……なんだ、お前やん、ちゃんと泣けるじゃないか。」

透明な雲を降らすにこつは、きっと誰よりも人なんだね。」

泣けるよつに、小生が居てやるから。だから、

(だかう)

「ほり、笑え。」

バナーナの勘違い。

毛利×大谷

ほんの興味だつた。

サンデーの名残りのせいだと、言い切つてしまひたかつた。
けれど、できない。

事の発端は、大谷との茶会。（ところづ名の悪巧み）

「大谷、一つまうらぬ事を聞くぞ。」

「あい？」

「わ、わ、愛についてよ。」

あの時の大谷のポカンとした表情すら、鮮明に記憶に残つてゐる。

「貴様は誰ぞ懸想をする相手は居るか？」

「同胞、急になんの「答える」

…居る訳無かる。」

「そうか。」

訝しげに首を傾げる大谷に、更に問うた。

「大谷、愛とはなんだ？」

「ぬし、誰ぞ良い人でもで「なんだ？」

… そ奴を大切にしたい、とかそういう気持ちである。」

また台詞に被せて来おつて、と毒づく大谷だったが、我は気にしていなかつた。

「大切にしたいと思う事が愛か？」

「知らぬわ。愛は人それぞれの型があるらしい。」

「…では、相手を喰らいたいと思うのは、愛か？」

「同胞よ、色恋の話なら前田の風来坊にでもしやれ。我が分かるはず無かる?」

盛大に溜息をつく大谷の肩を掴んで、床に叩きつけるように覆いかぶさつた。

「 も、うつ…？」

「これも愛の型だろ？？」

白頭巾がズレて口元が露わになる。
水分が足りていなか乾いて見えるそれに口を寄せ、チラと相手の顔を見た。

(セすがに泣きはしな――つ―!?)

まさかの赤面だった。

これから来るであろう感触に備えて、眉間にシワがよる程きゅうつと目を瞑り、
手も硬く握られて居る。

「 … ?」

いつまでも反応のない我に、大谷はようやく目を開けた。

「 悪ふざけが過ぎるわ。」

ふい、と逸らされた顔。

まじまじと見つめていれば、居心地が悪さで逃げ出す。

思わず、その姿が（愛い）などと思つた我に頭突きを食らわせてやりたい。

ふ、と小さく笑んで、我は大谷を解放しようとした…が、体は正直だ。ピクリとも動かない上にこんなことをのたまつた。

「悪ふざけ、そつ思つか？」

ぴく、と小さく揺れる肩。行き場を失つた様に左右に振れる瞳。何か言いたげに開く唇…

「や、やめよ。同胞」

ぐい、と顔を近付けて、片手を下へ。

「何をだ。」

疑問符を置いてけぼりにして、腿の辺りをサラ、と撫でる。

「つ、ふ…われに、触れる」と、を…」

「我慢ならぬか?」

下腹部の中心をトン、と突けば「ひっ」などと小さく啼く蝶。

その首筋に舌を這わせたといひで、邪魔が入った。（いや、助けか
？）

「毛利わま」

刻を告げに来た捨て駒により、私は正氣を取り戻す。

「…しばし待て。」

大谷から退き、手を引いて起こしてやる。

お互に無言で、じう声をかけたものか分からず、情けなくも私は
突つ立つたままだった。

（謝罪の言葉を――）

謝らなければ、今後関係が悪くなりかねないところのことも承知していた。

しかし、謝りたくなかつた。

結局、何も言ひ出せぬまま船に乗り、安芸へ帰つた。

(とせとせ)

(可笑しい)

(とくんとくん)

(医者を呼ばねば)

(わゆりわ)

「ええいなんだと言ひのだしひ――」

心の臓が、音が、鳴り止まない。

「くわい

(いとなもの)

(計算し切れぬ……ツ――)

(傍に) (もう一度触れたい) (笑つて) (我だけに) (我的) (あの時の感覚が) (心の臓がもたない) (たすけ) (て)

言ひ訳を考えては打ち消して、へりへりと逆上せた頭の中。

なぜ問うた?

(懸想をする相手は居るか?)

居ないと聞き、安堵した。

(愛とはなんだ?)

貴様が望む愛が知りたかった。

(悪ふざけ、そう思つか?)

気付いて、欲しかった。

(莫迦か) (触れてから、我が気付くとは…)

きゅうつきゅうと締め付けられるような胸の痛みが、より一層増した
気がして、私は無意識に大谷の名を呼んだ。

バーナの勘違い。（後書き）

この二人は百合っぽいなと思つたりします。

すれ違いメロン。

黒田×大谷、家康×三成前提の黒田×三成と家康×大谷
誰も報われない。枷なしかんべ。豊臣時代。大谷さんはまだ歩ける。

以上が許せるお方はどうぞ、お口汚しを…

誰もいないと思って居るのだろうか。

薄暗い廊下を手を繋いで歩く家康と三成は、傍目からは幸せに見える。

ただし、傍目からなのだ。

「ヒ、ヒ…あ奴らは仲が良いなあ。」

小生の隣の恋人は、対抗でもする気か手をそつと触れさせた。

その手を握つて、

「ああ、そうだな。」

と、適当に返して、小生は見慣れた銀髪を田で追つた。

「お前さんも人が悪いな。」

「貴様に言えたことか？」

何も身に付けず、肌を合わせる。

銀髪を撫でれば、気持ち良さひとつ田で細める、こいつは、

「どういふ意味だ？ 三成。」

家康の恋人だ。

けれど、今の小生たちも傍目からは恋人同士に見えるだろう。

「刑部に田をやらなかつた貴様に、言われたくは無いな。」

「そうだつたか？」

「ふん、最低だな。」

「じつちが。」

次の言葉を待たず口を塞いでやれば、べもつた声が耳についた。

「……あ、かんべ、え……もつ一回だ。

「綺麗な顔して、ほんと淫乱だな。」

「家康の前じやうけにもこかないからな。」

「同衾もまだか。」

「何も知らぬフコヒコののも疲れる。」

「ひりかひともなへ口付けて、夜を過いした。

「暗、昨夜は……じに醒了。」

ギクリとした感覚なんて、いつの間にか忘れた。

「ああ、悪いな。終わらせたい仕事があつたから籠つてたんだ。」

知性派と言つだけあつて、仕事と言えば疑われないことを、小生は知つてゐる。

「やうむくれると、可愛い顔が立派にならぬがいい？」

わしゃわしゃと髪を撫でれば、まだ文句を言こしながらその口調は和らぐ。

ああ、よかつた。今回もやつ過いせた。

内心で安堵しつゝ、本当に仕事があつたことを思い出して手を離した。

その時、刑部が小さく「よなら、よ」と言つてたなんて、知らなかつた。

「三成。」

「やうつたいたいほどの笑顔で、私の名を呼ぶ。

「まじり、ここに寝癖が付いてるや。」

「直す時間が無かった。」

官兵衛と居たから、なんてもちろん言えないが。

「わ、その……そういう三成も良いな！あ、いや、可愛ことと言つか新鮮と言つか……」

「抜かせ。」

「本當だ！三成は可愛い……！」

言い切る家康は、私と官兵衛の関係を知つてもそつ言えるのだろうか。

照れたフリをして、後ろを向き歩き出した。

だから、見えなかつた。

家康の笑顔が苦しげに歪められていたなんて。

「刑部。」

「三成か。」

廊下ですれ違つた刑部は、いつも通り私に笑いかけた。

「部屋へ戻るのか？」

「ああ。」

貴様の官兵衛が待つてゐるからな。

これも言えないと。

「刑部はどうへ行く？」

「我はちと太閤の元へな。」

「相変わらず、秀吉わまはお前をしつかり評価して下せりといふの
だな。」

「なに、それはぬしらも同じである?」

家康と私が一緒だと?

それは違うと言いたかったが、黙つておいた。

「ではな。」

「あ。。」

刑部が私の横を抜けた。

貴様なり、すぐに気が付くと思っていたのだが、見込み違いか。

嘘だつた。何もかも。

太閤の元へなど行かぬ。

あれは、ただのその場しのぎ、三成から離れたかった。

友だと思っていた、恋人だと思っていた。

けれど、それもマコトではなかった。

離れたくて、一人になりたくて、会いたくて、廊下を駆け抜ける。

「……！」

「おひと」

角でぶつかってしまったのは、家康だった。

「刑部がそんなに慌てているなんて珍しいなあ！」

ぽん、と肩に置かれた手。

この手だって、三成に触れたいに違いないのに。』

「家康……」

「うふ？」

「なぜ、じつになつてしまつのだらひ。」

ポタリ、ポツ、ポツ

声は出なかつた。

ただ田から溢れる水を止められなこままでいた。

「大切だからこそ、気がついてしまうんだな。」

「ああ。」

「だが、それでもワシは繋がりが欲しかった。」

「…」

「だから、ワシは…」

「…ん。」

「気づかないフリをするんだ。」

私は、ぬじをただの阿呆と思つていた。

違つ。

ぬしは、誰よりも聰く、悲しき男だ。

自分を見ているような気になつて、家康を抱き締めた。

それに呟わせて、我を抱き返す家康も、泣いていた。

(我はただ) (いやつて抱き締めて欲しかった)

その日の夜に、秘め事が増えた。

互いに隠しをして、

「家康」

「刑部」

名を呼んで、傷を舐め合つ。

愛しい人の名を伏せて、愛しい人への愛の捨場に、互いを選んだ。
満たされない、カラカラの何かがヒビ割れて壊れる音がした。

すれ違いメロン。（後書き）

あるえ、大谷さんが幸せじやない…マイガツー！

チエリーは小さく爪を噛む。

すれ違ひメロン。の続き

秘め事は、それからずつと続けていた。

官兵衛と三成が共に居る時に、我は家康に縋り、家康も我を求める。

滑稽よな。

家康が触れたいのは、三成だと言ひのこ……それが触れるのは、

醜い我なのだから。

笑いもできぬ。

『刑部、つ……平氣か?』

我を抱く時、必ず家康は心配をした。

無理をさせていなか

痛くはないか

何度も問う。

(ナビ) それも全て

三成に宛てたものなのである?

だから、私は、もう終わらせてしまいたかった。

(暗) (暗) (く、り)

「」最近、やけに家康の機嫌が良い気がする。

だが、私は何かした覚えは何も無い。

なのに、「」してあんなに笑っているんだ?

ぼ、「」としたまま歩いていたところ、見慣れた白頭巾が廊下に現れた。

「刑部か。」

「三成か、朝餉は取つたか?」

「こらん。」

いつも通りの会話ををして、そのまま横を抜けようとした。

「三成。」

ぴたり

その声に合わせて足を止める。

やはり、貴様は気付いて居たのだな。

「三成……」

「なんだ。」

刑部の声は震えていた。

「三成。」

「だからなんだ？」

「…頼む。」

振り返らない。

けれど、刑部は泣いているのだろう。

刑部がそこまで執着するのは、私とむづつしかない。

「……あ奴を、返してくれやれ……」

やはり、官兵衛か。

「刑部、一つ勘違いをしていいのか?」

「…?」

「返せも何も、あいつは自分で私を選んだ。もう貴様のものではない。」

違つか?」

私は官兵衛に好意など抱いていなかった。

それは向こうも同じで、だから共に居たのだ。

「貴様なら分かるだろ?」

振り返れば、刑部は背を向けて俯いていた。

「……まあでじておこで、心が痛まぬと血のひも可笑しな話だ。

むしり、勝ち誇つたよつな氣分をえする。

「ナリひよな。」

声を絞り出して、刑部は言つた。

「……あ奴は、ぬしを選んだ。……すまぬ。」

その言葉を聞いて、私は歩き出す。

今、刑部が一番会いたい奴に会つために。

「聞け、官兵衛。」

「なんだ？」

「刑部に会つた。」

わざわざ三成が報告するから、何かあつたんだろう。

「どうかしたのか？」

「世間話だ。」

「刑部が？」

「あ、三成相手ならあり得ん話でもないが……

「その後、言われた。返して、と。」

楽しげに笑う三成と、言われた事に対しても感情も湧き上がらない小生。

「そうか。」

「それだけか？」

冷めた奴だ、と呴きまた笑う三成の頭を撫で、抱き寄せる。

「良いのか、帰らなくて。」

「今帰つても数珠が飛んでくるだろ？」

「それもそうだ。」

抱きしめたのも、接吻をしたのも、抱いたのも、笑顔を見たのも、
好きと言ったのも、名を呼ぶ事さえ…

もう思い出せないほど遠い記憶になっていた。

忘れたのは、小生に愛がなかつたからか？

それとも、

脳裏を過つた考えは、快樂に飲み込まれて行つた。

「帰つたか。」

部屋の前には、刑部がいた。

「おう、ただいま。」

ひら、と手を上げて中へ入る。

動じない刑部を招き入れて、座らせる。

「なんか用か?」

「用が無くては来てはならぬのか?」

恋仲なごと、と薄ら笑いを浮かべる刑部は、傍げかつ、妖艶さを醸し出していた。

「まあ、用もあるが。」

「仕事なら断るが、お前たちの寄りすのは酷いのはばかりだ。」

「エ、エ……一つざとに決まりである。」

いつもこつも遠くにばかり行かせやがって、と刑部を軽く睨みつければ、

肩を竦めてはあ、と息を吐いた。

「……どんなに遠くにせしても、ぬしま帰つて来て我に文句を言ひやせ

「当たり前だ。」

「……もうこいつはおつを、好いておつた。ずつと前からな。」

すす、とひかりにせりつて来て小生に寄りかかり刑部。

(こんなに細かつたか?)

触れたら、壊れてしまつてゐた、した。

「暗、我は、誰かを慕つといつて持ちがよつ分からぬ。」

「ああ。」

「だから、どうすればぬしが喜ぶのかも、我的元に帰つて来るのも、分からぬ。」

「…おい、何言つて」

「やうである、ぬしは、我から離れるばかりよ…好いても、好いても、

…我を見てはくれなんだ。」

俯いて表情の見えない刑部に触れよつとした。

けれどそれは、最後に残つていた良心が咎めた。

(汚い手で触るな、ってか。)

自分の心と体の動きが噛み合わない。

「すまぬ……」んなことをいつも無かった。最後に、一つ頼まれてくれぬか?」

「ああ、つい、しゃれ……」

やはつ、反応するより前に体が動いて、小生は頷いていた。

氣恥ずかしそうに笑う刑部に、どうしてか涙が零れた。

「借りるだけ、よ……今だけ。」

貸すとか借りるとか返すとか、そんな言葉が聞きたかった訳じゃないの。

小生は無言で刑部を抱きしめた。

「……あたたかい、なあ……」

「ああ」

「久しぶりよな。」

「ああ」

気の利いた言詞の一つか二つ、かかれないとんかね。

小生は、こんな時ばかり臆病だ。

「…好きよ。」

「…」

「…すまぬ。」

好きと返せない、謝るべやなのこ、言葉が出て来ない小生。

「…黙。」

「…ちつ、ぐ…」

「ぬしさ、優しさ…」

ああ、そら。

小生が三成を見ていた時、お前さんも小生を見ていてくれたのか。

遠くにばかりやつたのは、三成から離したかつたから、

そんで、文句を言つて小生が自分のところに来るよつこしていたんだな。

今更気付いたつて、もつ遅いんだるつ。

刑部の涙すら、拭えない。

チエリーは小さく爪を噛む。（後書き）

本当はこの後に三成と家康のターンが待っていましたが、あまりにも報われなくて私の心が折れました。
…希望されたら、書こうと思います。
やつぱり報われませんが、それで良いなら…

みたらじペーチ。

大谷 × 真田 × 大谷

童話っぽい。幸村が姫。

姫は、憂鬱でした。

なぜならば、この世界では姫だから。

戦には当然出してもらえず、ただ結婚して子を成すためだけに生まれたようなものでした。

だから、田の前に悪い魔女が現れた時、姫は抵抗せずに捕まつたのです。

「外の世界は、じへなつてこるので、じれるかー。」

「街一つで騒がしい姫さまよな。」

「連れ出したのは貴殿でしょう。」

「攫つてくれと言つたのはどこの誰だったか。」

魔女は、足が悪いらしく、ふわふわの空飛ぶ絨毯に乗っていました。

心のきれいな者でなければ乗せられないなんて嘘を言って、姫を乗せようとしませんでした。

けれど、姫とて頭を使います。

「いりすれば乗れるではありますぬかー！」

魔女の膝に乗つて誇らしげにそう言つて、驚いた魔女は仕方なく姫を膝に乗せたまま、空を飛びました。

「きれいー……」

ついに国から脱出してしまった姫は、夕焼けに照らされる国を見て、そう呟きました。

さあ、姫を自分の城へ連れ帰った魔女は準備に取り掛かります。

この姫をダシに、やつて来た者たちを逆に捕まえ、身の回りのことをさせようと思つたのです。

有能なものが手に入れば、姫を国へ返すはずでした。

けれど、姫が魔女の世話をしてしまうので、それは叶わなくなつてしましました。

「姫、本が読みたい。」

そう言えば姫はたくさん書物を抱えて来てくれるのです。

「姫、少し寒い。」

そう言えば、姫は暖炉に火を入れてくれるのです。

「姫、腹が減った。」

こればっかりは姫にはできず、魔女がすることになつましたが。

それでも魔女は、姫との生活を好きになりましたが。

だから、姫がこの城から出ていかないように様々な持てなしをしました。

姫が飽きないよう『ドラゴン』遊び相手にして、戦わせてあげました。

それなのに、

「魔女殿、某はそろそろ誰かと手合わせがしとハジケコます。」

姫がそんなことを言つものだから、魔女は困ってしまいます。

仕方なく、姫の情報を掴んでやつて来た暗という奴と戦わせてみました。

驚くことに姫が勝つてしまったのです。

「姫、楽しいか？」

「はーー。」

嬉しそうに笑う姫を見ると、魔女は心臓の辺りが痛くなるような気がしました。

暗には国へ帰つてもらいました。

そのため、姫を取り返しにやつて来た者が姫の返り討ちに遭つという事件は、

國中に知られてしまつたのです。

「あのprincessはどうやら魔女に操られてるんだな？」

さすらいの旅人は、そう勘違いをして魔女の城へと向かいました。やはり同じように姫が相手をしましたが、この旅人、かなりの腕前です。

お互に一歩も引かぬ戦いが三日三晩続き、ついには姫が負けてしましました。

「姫！！」

魔女が姫に駆け寄ります。

姫はもう、虫の息でした。

魔女は最後の力を振り絞って、姫に魔法を掛けました。

姫を救うことと引き換えに、姫を運命の人のキスでしか目が覚めないようにしてしまったのです。

目が覚めた時、姫の時間は動きだし、目の前には運命の人者が居る、そうなれば良いと、もう魔法を使えなくなつた魔女は思いました。最初のキスは、あのさすらいの旅人でした。

一人のキスを見ていると、とてもお似合いで、魔女はもっと心臓が

痛くなりました。

けれど、姫は起きません。

旅人は帰つて行きました。

それから何十年が過ぎても、姫の運命の人は現れませんでした。

魔女は焦つていました。

自分の寿命が近いことを悟つていたからです。

皺くぢやの手で姫の柔らかい頬を撫で、魔女は泣きました。

あの時、自分が城から連れ去らなければ、と、後悔しました。

魔女は最後の日、姫の眠るベッドに腰を掛け、その手を取りました。

「姫。」

もう一度だけでも目を開けてくれたなら…

魔女は悲しげに笑いながら、姫の手の甲に唇を落としました。

ぴく

と、微かに姫が身じろぎしたような気がしました。

ぼやける視界の中で、姫の笑顔だけが輝いていました。

「… 最後に、良い夢を見た。」

「某を置いて、勝手に死なないで下され、魔女殿。」

姫はそう言しながら、田を開じる魔女に口付けました。

あるとじひじょい。

魔女は死の国から連れ戻され、みるみるひたすら戻つていってはありませんか！

「これは…」

驚きのあまり声のない魔女に、姫が言いました。

「魔女殿が某に掛けた魔法のお陰で、某も少しだけ魔法を使えるよ

「…になつたの？」
「…」

「…私は、ぬしは運命の人のキスでしか目が覚めないよつこしたのに…」
「…」

「まだお分かり頂けないのでござるか？…某の運命の人は、貴殿で
ござる。」

耳を疑う魔女でしたが、その手は姫と繋がつたままでした。

「某と共に、生きては下せらぬか？」

魔女は胸がいっぱいになり、ただ頷きました。

「…喜んで、お受け致すわ…姫さま。」

それから一人は末永く幸せに暮らしました。

みたりじペーチ。（後書き）

「都合主義バンザイ！！」

幸せにしたかったんだが、方向性を間違えたよつな氣もある。

グレイペの黒田品^{ロード}

黒田 × 大谷

現代転生とバサラ時代が入り交じり。現代によ谷さん。

こんな夢を見た。

「お前さん、誰だ？」

小生が入ると、少し窮屈な部屋に、一人の少女が居た。

「さあ、誰だつて良かる。」

ふむ、それもそうか、と頷いて、はて、と首を傾げた。

「じいねで、お前さん、じいじはどうかね？」

痩せこけて、頬の辺りがやや壅んだ少女は、じつ答えた。

「病院よ。」

病院、なんだそれは、とやはり首を傾げるが、鼻を突くシンとした匂いに、

きつと薬師がいるといふだらうと思つた。

「お前さんは、どこか悪いのかね？」

「じつしてだか足のある寝床の上にいる少女は、いつ答えた。

「足と、肌が弱いのよ。」

なるほど、だからそこから動けないのか。

布団に隠れてしまつてはいるが、きつと足は包帯で巻かれているんだわ。

「お前さん、ずっと一人か？」

薄い桃色をした部屋で、ずっと。

首の辺りに管を通した少女は、いつ答えた。

「……やつよ。」

そうか、一人か。

「なら、これから小生が見舞いに来てやるうか?」

夢だらうが、なんだらうが、これも何かの縁だらう。

ぼた、ぼた

「…………もつと早うに、来やれ…………ばか。」

その涙を拭おうと手を伸ばした時、少女の目が見えた。

それは、自分が最も憎み、嫌つたあの……

「……ひ、……へ……」

「ほえ?」

「…まあ富兵衛もまあ今頃お田覚めのよひで。」

嫌みつたらしく小生の頬やら前髪やらをべこべに引っ張るのは、

刑部。

「…もう、泣いてないんだな。」

ふと口を突いて出た言葉に、刑部は首を傾げる。

「いや、なんでもない。夢を見てたんだよ。」

少女は、もう余命が一年も無かった。

幼い頃から病弱で、たまの旅行に行けば事故で両親を失った。

友は、時々やつてくる喘息持ちの三成と言つ男だけだった。

少女は、前世の記憶を、断片的にだが、覚えていた。

(暗、暗…)

昔の自分は、きっとその（暗）が嫌いだつたのだろう、とずっと思つていた。

薄桃色の部屋に移され、とうとう死を覚悟しなければいけなくなつた。

何一つ良い事がないまま、たつた一人で。

そんな時、

こんな夢を見た。

ノックもなしに病室へ入つてきた男は、

「お前さん、誰だ？」

声、その形、手にはめた枷。

男は、自分の覚えている中の、暗、だった。

他愛もない疑問と返答のやりとりが繰り返されていく。

(暗、暗)

「一つ質問が重なる」と、自分は記憶を取り戻すのに、相手は、我
が誰かと言つ事すら、気付いていなかつた。

「お前さん、ずっと一人か？」

一人になつたのは、ぬしが居ないせいよ。

そう、言つてしまひたかつた。

「なら、これから小生が見舞いに来てやうつか？」

現世では、顔も見せぬくせに。

そんなに優しい言葉を掛けるな、やめやれ。」

もつと我に時間があつたなら、もつと我が健康であつたなら、

「……もつと早うに、来やれ……ばか。」

目が覚めた時、眼瞼は腫れぼつたくなつていて、ツン、と鼻の奥が

痛んだ。

「痛ててててッ……ひょ、おこ、もつじ優しくできるのかねー?」

廊下の奥で、きわあきわあと騒ぐ声と、それを咎めるよつた看護師の声が聞こえた。

「もつ、そんなに元気なら入院なんて要らないんじゃないですか?
?黒田さん。」

「痛い痛い!折れた骨があーー!」

現れたのは、両手を折って、まるで枷のよつて包帯を巻かれた、

暗だった。

(じゅうこはよ、遅すぎるわ、暗め。)

グレイプの夢日記。（後書き）

この後、両手の使えない暗へあーんとか、キノちゃんの闘病生活とか、色々ドラマがあるはずです。

誰か代わりに書いてくれんかな……？

ねじたの中のペタ。

大谷 × 鶴姫

会話文です。

「大谷さんー今年もー大量のーみかんをつー。」

「落ち着け巫女殿…」

「これが落ち着いていられますかー寒いです、寄つてください。」

「ねざねざここに入る必要はあつたか?」

「大有りです。寒いのは手足だけじゃないんですねからね?」

「我の「タツガ…ぐふえ、巫女殿、腹を押すな腹を。」

「わつわ、じうじういつ四つ時黙つてしゃつとしてくれないんですかー。」

「今さゆつとしたら我は何が出そつな氣がしやる。」

「わやああーあつち行つて下をこーーー。」

「押すなど言つたである。」

「いたつーだからつてどつして呪くんですかーー?」

「悪いことをした子を撫でないと困つか。」

「ええ、わつですーわるー」

「……はあ。」

「髪をぐしゃぐしゃにならして下をこつー。」

「撫でて欲しかったのである?」

「もつひとひか、優しくですー。」

「我には難しい相談よな。」

「えつ? あれだけ眠つている私を撫で回すくせに何を言つてゐるんです?」

「……なぜ起きてると言わなんだ。」

「そうしたら撫でてくれないに決まつたらからです」

「とこうか、撫で回す程でも無いと思つが。」

「…知つてこますよ大谷さん、私の腹を撫でつつ『発展途上よな。』と呟いたことをー。」

「はい、なんのことかさっぱり。」

「胸と腹の違ひが出てなつてことですか! そりゃ孫市姉さまのよ

「うになつてませんけど…」

「み、巫女殿、落ち着け。」

「大谷さんが大きくしてくれないからつてことですよね？」

「なぜそこで我の名が出やる。」

「だつて胸つて揉めり「やめよ巫女殿。」

「えへへ、あつたかいです。」

「全く…甘えたいなら最初から言いやれ。」

「最初から言つてたのに甘えさせるのを恥ずかしがつてたのはどつちですか？」

「…困つた巫女殿だ。」

「困つた大谷さんです。」

ねいたの中のペタ。（後書き）

大谷さんと鶴ひやん。

結構好きです。

ほわほわした空氣を弄してくれれば良いかなあ
…

ラ・フランスの動物愛護。

黒田 + 大谷

大谷さんが猫、かんべが犬。

「ご主人、飯はまだかね。」

「我がひっくり返してやつたわ。」

「なんてこつた。」

「ご主人、構つてくれんかね。」

「主様は今忙しい。」

「そいつは残念。」

「代わりに我が可愛がつてやる。」

「お前さん、爪を構えて何をする気か。」

「『主人、 散歩に行こ』」。

「主様は今居らぬ。」

「へへ……。」

「我と行くか。」

「『主人とが良いんだ。』

「『主人、 遊んでくれんかね。』

「主様は今パソコンに夢中よ。」

「あの絡繆を壊してしまおうか。」

「主様に嫌われるだ。」

「『主人、 遊んでくれ。』

「

「聞き分けのない犬め。」

「IJKの尻尾で誘惑してやるや。」

「主様はパソコンの中のホジさんに誘惑されたおるが。」

「なぜじゅー。」

「…。」

「なぜじゅー。」

「何を騒いでおる。」

「遠吠えだよ。仲間が気付いてくれるんだ。」

「気付くどいつもなる。」

「来てくれる。」

「嘘を吐け。」

「元々、主様は猫派で、我の『主人よ。ぬしの』主人は主様の、と
と様である。」

「小生の『主人は』主人だよ。」

「なにゆえ。」

「犬嫌いな『主人だけ』、小生を嫌つちやいないから。」

「ぬしだけ特別扱いか。」

「お前さんもだろ。」

「…主様は動物アレルギーだったな。」

「ほらな。」

「お前さんは小さいな。」

「猫だからよ。」

「『主人は小さいのが好きなのか？』

「ちつぱいも好きだと黙つておつた。」

「わふ。」

「丸くなつて我の真似か。」

「『主人に好かれるなら、それでも構わんさ。』

「暗め。」

「また小生の飯をひっくり返しただらう。」

「はて何のことか。」

「流石に怒つたぞ。」

「ひひひ。」

「…。」

「もつと何か言ひしみせ。」

「…。」

「あ奴め、黙つたまま散歩に行きおつた。」

「…」

「嘘をついていた気がしたからだよ。」

「…泣きながら鳴いていたんだ。」

「…」

「…」

「のあんのあん。」

「…」

「ぬしが教えたのである、遠吠えよ。」

「ぬしが教えたのである、遠吠えよ。」

「仲間は来たか？」

「主様が帰つて来ててくれた。」

「そこは嘘でも小生が来てくれたと詰つべきだ奴いつ。」

「死んでも嫌よ。」

「なぜじや。」

「（）主人は今日も絡繆とにいらめつ（）か。」

「私は先ほどもふもふされた。」

「ずるいぞ。」

「ひひひ。」

「（）主人、早く小生に気付いとくれ。」

「へふじゅつーすび…」(飯だ、おいで。

「わふー。」

「のあん。」

(またひっくり返す気だな)

(しかしこれじゃひっくり返せぬ)

(なるほど、目と目がくつこつこするな)

(落ち着いて食らこやれ、我的目にドッグフードが入ってしまつ)

(ふうふう)

ラ・フランスの動物愛護。（後書き）

家では猫飼つてます。

元ネタは2つの何かの「ピペだつた」氣がしますが、記憶力の無さ
で思い出せません。○ーー

鳴き声ですが、にゃあ、って鳴く猫が身近に居ません。

のあん、とか、のわん、と鳴いてるのがいるので、参考にしました。

血染めのアプル。

三成 × 大谷

千人斬りと称し、ここ最近、城下町の者が斬り殺されるという事件が相次いでいた。

とある町奉行が、そのことを太閤に知らせに来たらしく。

「病は千人を斬り、その血をねぶれば完治するとして、誰か病人の仕業ではないかという噂が…」

「それが吉継だと申すのか。」

「へえ、なんせ噂なものでして…」

ペコペコと頭を下げる町奉行と、静かながらも激怒する太閤。

怖や怖や…

我関せず、何もせねば、疑いも晴れよつ。

床に戻ると告げ、早々に寝てしまう。

目が覚めたのは、丑三つ時。

体の上に、何か、否、誰かが覆いかぶさつた。

「よく寝ているな。」

我の頬を撫で、薄く笑うのは、我が友、三成。

まどろむ意識の中、ひんやりとしたものが口に触れた。

そこに神経を集中させれば、三成が何かを塗っているらしかった。

(薬、か?)

不治の病に効く薬などあるまいと、と、薬にはあまり頼らなかつた
が、

それを知る三成だからこそ、こつして我が寝ている間にこいつそりと
塗つて――

(一……これ、は……まさか、)

塗りたくられていたモノから漂つ香りは、戦場に居る時に感じじるや
れと同じ。

「まだ、田にも達していない……もつゞじ待ってくれ、刑部。」

私は、動けない。

これは、薬だと思っていたこれは、

（血、か。）

薄い唇に紅を指すように塗られた、人夫の、血。

「刑部、刑部……」

逃がすまい、として抱き込まれ、口を重ねられる。

ぬる、としたものが入り込み、口内までもが、香りで包まれる。

（死臭……）

愛おしそうに頬を撫でる男の手から、体から、匂う。

くづくづくと、熱い舌に脳みそまでもが溶かされてゆく。

「あれが「つぶ。」

幼子が母を呼ぶのとは違ひ、そつ、欲しいもの求め雄の声が、頭上で響いた。

(三成、三成…)

重い瞼を押し上げれば、銀の円が、狂氣の色を含んで、我を見下ろしていた。

(ああ、われは…ぬしを拒めない)

血染めのアプル。（後書き）

この後、千人斬りはぱつたりと止みます。

だつて血なんてねぶつた（舐めた）ところで治りませんもの。

パー・シモンと繩と無知。

佐吉 × 大谷

佐吉は知っていました。

蝶が今まさに羽化しようとしていることを。

だから、手伝おうとしただけなのです。

薄く柔らかい透明な羽を引っ張ると、

それはピクリと音を立てて佐吉の両手に残りました。

ポトリと地面に落ちた蝶。

どうして飛ばないのだろう、と佐吉は思いました。

せっかく、殻を取ってあげたのに。

佐吉は知らないのです。

それは殻ではなくて羽だということを。

「じょうがない、わたしがめんどりをみてやるー。」

ぴくつぴくつ

返事をするよつこ、蝶が、いいえ、

芋虫に戻ってしまったようなものが動きました。

「おまえのなは、きよしふ。」

蝶は今も、籠の中で飼われているのです。

パー・シモンと幽と無知。（後書き）

何が言いたいかと言つてナビもの無邪気つて時々こあいつてことです、たぶん。

書いたのが深夜でしたんで、何書きたかったのか自分でもサッパリです。

あ、リクエスト受け付けてます！

なんていらないフリュイの末路。

私 + 大谷

作者が出ています。

季節のフルーツシリーズを書き終えて、一旦手を止めて大谷さんと対話した。

「ぬしはなぜ、こんな夢物語を書く？」

「…きっと私が幸せになりたいんでしよう。」

「我が臣に愛されると、ぬしは幸せになるのか。」

「はい。大谷さんは幸せになりましたか？」

「慣れぬ事ばかりで戸惑いの方が大きいわ。」

「そりや失礼しました。…ふは、きっと、ここで書いた事も私の希望でしょうね。」

「ぬしが書いているのだから、当然である。」

「そうですね。だから、正直、こうしてお話をたくはないんです。私は私の願望を喋らせる」としかできません。」

「 なり何も申すなと?」

「 あやか。存分に喋つてやれこよ。」

「 ぬしが書かねば、我は言葉を発せぬ。」

「 わつでしたね、何を喋りたいんですか?」

「 ぬしの悪がままを。」

「 … 意地悪ですね、流石です。脳内でボイス再生余裕でした。」

「 戯れ言はもう良か。」

「 はい… では、感謝を。」

「 … ジリモで読むとは、なかなかに我慢強き者よな。ヒヒ、気が向
けばまた来やれ、

じくえすとは隨時受け付けておるわつよ。」

「 ありがとうございました。」

「 竹。」

「 なんですか?」

「 我はぬしが書くよつしかないな。」

「 ええ、わつですね。」

「…結果的に、ぬしが我を幸せにしてくれるのよな。」

「…………。」

「画面の向いにいるせむ、幸を降りせるか？」

「…じくなこですょ、大谷さん。」

「…。」

「不幸を降りせなくて良いんですねか？」

「…。」

「びひじひ喋つてくれないんですか、私の想像でしょう。」

「…。」

「…そんな」と言わせたら、もひ引けないんですよ。」

「…。」

大谷さんは、画面の中で不適な笑みを浮かべるばかりだった。

「…幸せにして下せこ、って意味ですよね、さつきの。」

「殺し文句でしたよ。」

「何か言って下さいな。」

「大谷さん。」

彼自身の言葉が欲しいと、最近よく思います。

ここにちは、そつちはどうですか。

いつもはなんとかやっています。

液晶の壁を超えない私は、今日も彼に言葉を喋らせて、自分を幸せにするのです。

なんていらないフリュイの末路（後書き）

1～12円までのフルーツ書き終えたどー！

フルーツの解説は活動報告でします。

少しは楽しんでいただけたでしょうか？

私は至って大丈夫です、危なくないです。

そしてリクエストを下さる（――）m

何が言いたいのかやつぱり分かりませんが、

今後も大谷さんを見守って欲しいです。

ぱきぽき力力オの日。

大谷さんとみんなでポツ キーゲーム

伊達政宗 × 大谷吉継

Are you ready?

一 6本も持つてどれを食えと

真田幸村 × 大谷吉継

「アラカルノ...!」

参るも何も十三日かぬしの体温で溶けてあるわ。

石田三成 × 大谷吉継

「刑部とボッキゲーム」

「やれ三成、これは毎ポツキーだつたか? 何やら赤い!」

徳川家康 × 大谷吉継

「ずるいぞ刑部、自分から折つてしまふなんて。」

「…せねば我が食われてしまつだある。」

前田慶次×大谷吉継

「今キスしたら、さつとチラリの味だらうな、してみ「ない。」…
残念。」

長曾我部元親

「いただきます。」

「壁に押し付けるでないわ！」

毛利元就

「…3本では、なかなか折れないはずよ。」

「待ちやれ、ぬしまで阿呆にツ…む、ぐ…」

まきばき力カオの日。（後書き）

落ちを毛利さまにお願いしてみました。

私は彼らをなんだと思っているのだろう。

あ、クロカン忘れた。

忘れんぼシユガ一。

お市 + 大谷

お花畠に行きましょ'う?

やつ面つたのは、いつだつたかしり。

蝶々さんなのだから、お花は好きなはずでしょ'う?

驚いた顔が、とても可愛らしかつたわ。

下りぬな。

そう、言われてしまつたのだけれど……やつぱり、蝶々さんは優しいのね。

「綺麗ね。」

「わよづか。」

「蝶々さんば、やつ思わない?」

千日紅、三波丁子、寒菊、山茶花…きれい、きれい。

いけないわ、市つたら、一人ではしゃいで。

慌てて蝶々さんの元へ戻るの。怒らないで、ごめんなさい、もう勝手なことはしないから。

「「「みんなで、」「みんなで、」「みんなで。」

「第五天、何を謝つておるのか、我にはとんと分からぬな。」

「……怒つてないの？」

「何を怒れど。」

「市が、どこかへ行つてしまふこと、蝶々さんほ怒らないの？」

* * もは、怒つたわ。

それが誰だったのかは、よく分からぬけれど、きっと市が悪い子だからね。

「…あた、戻つて来るのである、ならば良し。」

蝶々やさんにはいつ書いて、竜胆を市にて差し出すの。

「…市…」

「ぬしと我以外、ここ誰が居るのか？」

「やうね、ふふ…やうね。」

市もお花をあげたかったけれど、ちよつと降ってきた葉っぱが田に止まつたから、

それを蝶々さんの髪に飾るの。

きれい、きれい。

「銀杏、か。」

「桜もやつと似合つわ。」

闇色をこなす内緒。だつて怒られてしまつむの…

「蝶々さん。」

「うん?」

「…市、お花は好きよ。」

大好きなお花が、一つあった氣がある。でも、思に出せない。

「ああ。立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花… ぬし血頭も花のよつよ。」

「蝶々さん、お花、好き?」

「わあ〜… どうでありますな。」

蝶々さん、蝶々さん、お花(市)を嫌いにならないでね。ずっと、
まわる面のわ。

「…帰るとこやるか。」

「はー、蝶々さん。」

蝶々さんは呪が悪いから、興に乗ってこら。それを市が追いかけ
る。

ひやごと市の歩く速さをかわすのよへ蝶々さん、優しく
かい。

「第五天。」

「なあに、蝶々さん。」

「……いや、なに……」ぬじの歩く姿が、ほんの少しあつたと思つただけよ。」「

「ふふ。」

蝶々さんは口が上手いのね。

一瞬だけ、ほんの一瞬、蝶々さんの声が震えたのは、秋の風に吹かれて、寒かったからかしら……？

帰つたら、一緒にコタツに入りましょ~?~

ね、蝶々さん。

忘れんぼシユガ一。（後書き）

忘れられるのは、悲しいですね。

長政さまは現在市ちゃんの記憶にあります。

そして花言葉の紹介です。

竜胆リンドウ：悲しむあなたを慰めたい、あなたの悲しみに寄り添へ、正義、悲しんでこるとそのあなたが好き、淋しい愛情

銀杏イチヨウ：長寿

闇属性ヤクヒツはどつこいんなに悲しくなるんでしょうか。

南部やーんーー♪閲覧のお客様の中に南部さん及びイタコ、降霊術を習得してこられた方はいらっしゃいませんか？

閲覧、ありがとうございました。

ソルトに悲劇。

明智 × 大谷

現代転生によ谷さん。学バサ設定。
ソルトに悲劇。

困った。非常に。

現在我は、とても化粧の濃い女子らに取り囲まれている。

「調子に乗つてんじゃねえよー。」

体育館の裏なんて典型的で古典的な場所に呼び出され、
どつせだから思い切り笑つてやうつと出向いたが…失敗した。

どつせまた、三成か権現辺りのファンである。

だいたい、調子になぞ乗つておらぬわ。

こちとら前世よつの付き合つよ、今更男女の中になる訳無から。

やつぱりやりたいが、前世なんて説明のしようもない。

小さく溜息を吐くもののなり、普段は整つた顔立ちが鬼の形相に歪

む。

そして、体育館の壁に押しつけられたよしほり、詰め寄られる。

数は7人と言つたところか。

「石田くんはおまといのをやめようとしたのよー。」

「…。」

「ううう時、わざわざお詫びするのもう少ししない事を、私は知つてこる。」

女房には見えないよつ、手を壁と牆の間にやつ、メールを打つた。
この奴らには悪いが、皿洗いが三成であるなりば、今から幻滅されてしまえ。

送信ボタンを押し、やれやれと一息吐いたといつて、腕を掴まれ、持ち上げられる。

「あ。」

「何ヤバヤ」とつぶんだよー。」

「早く移動しよう。」

うかつ。

先程のメールには、体育館裏としか入力していない。

氣を抜きあきたか、これは…髪の毛を全て剃られるくらいには覚悟せねばな。

クスクスという笑い声が頭上で響く中、埃くさい倉庫の床に、

我はまるで芋虫のように転がっていた。

腕は後ろで縛られ、口にはガムテープ。

前ほどではないが、やや動くのに不自由する足だけはなんとか縛られずに済んでいる。

「じりすのへやつわやつへ、

ケタケタと笑ながら我の髪を掴み、ぐい、と引っ張り上げる女子。

ああ、我に罵詈雑言を吐く口で成に愛だの恋だのを囁く口と誰のか。

恐ろしいことよ。

髪を掴んで引っ張り上げられ、そちらを見ればフラッシュをたかれ
た。

「！？」

「あー田え黙つてんじやん。」

眩む視界に、女子の一人の携帯電話が入ってくる。

まさか

「キヤハハハ！！ほらあつ、脱げ！」

制服に手が掛けり、ぶちぶちと布が歓れる音がした。

… またしても、うかつ。

甘かった。最近の女子は、こいつやって人を追い詰めていくのか。

上着のボタンは恐らくほぼ全て引き千切られ、Yシャツも無残な姿
になつた。

僅かにしかその存在を主張しない薄い胸と、それを覆つ下着の白が

田に痛い。

「うわ、貧相な体。」

「てか、マジ色黒くね？キモくね？」

「ええ～…? 石田くんばよ食乳が好きなのー?」

やこのやこのと、勝手な事を…

「あ、ねえー男呼んじゃお~よ。」

戦慄。

我の思考回路は一時停止する。

…今、なんど?

分かつてこのはずなのに、その答えを出すことを脳が拒む。

ヒヒ、我とて所詮は、女子っこことか。ああ、こんなにも体が震える、ふるえる…

つにはスカートにまで手が伸び、

ここだけまるで記者会見でも行われているかのような光の雨が、降

り注ぐ。

がらつ

突如、倉庫の扉が開かれた。

カツカツと倉庫内に響き渡る足音。

逆光に煌く銀髪。

そして、

「…随分と、楽しい事をしているじゃありませんか。」

笑顔を讃えながらも、地の底を這つよつな声。

「あけ、ち…？」

取れかかつたガムテープの中で、声が行き場をなくしていくのもる。

「大谷さん、先生を付けなさいと言つてゐるでしょ？」

お世話にも爽やかとは言えない笑顔で、少しありに歩み寄つては白衣をふわりと我に掛ける。

「わ…君たち、何をしていたんです？」

「ひーっ

効果音をつけるなり、それ。

だが、当の女子らは半ば放心状態であんぐりと口を開けている。

我とて同じ気分よ。なぜ明智が…

じぶりもじぶりになる女子らを眺め、明智は再び口を開いた。

「1組、××さん、×?さん。2組、——」

どうやらされは、口に腫る女子全員の右前からしぐれは顔面蒼白、

もはやどちらが悪人だか分からぬわ。

「…覚悟して、トセーね。」

白衣に身を包んだ我を横抱きこし、そう言つて

倉庫から出る明智の面は、悪人そのものであつたようだ。

処変わつて、保健室、通称・明智の住処。

「いやあ、それにしても良い格好ですねえ？」

舐め回すような視線を寄越すので、急いで白衣に腕を通す。ぼす、とこう気の抜けた音と共にベッドに降りた。ようやく一息吐いた。

「見ても面白いものでは無かる、ジャージを持つて来ては…くれぬよな。」

「良いじやありませんか、白衣似合つてますよ。」

ベッドの端に腰を掛け、明智は尚もニヤニヤと薄気味悪い笑顔を浮かべる。

その顔に数珠でもぶち込んでやりたいが、助けられた事に変わりはない。

だが……

「……なぜ、ぬしが来た。」

「貴女がメールしたからですよ、当然でしょ」

私は三成にメールしたと思っていたが。

送信履歴を見れば、確かに送り先は明智になっていた。

明智

浅井

石田

……なるほど、並ぶ順序を見れば間違えるのも無理はない。

「ふふふ……まあ、石田くんには、そんな姿見せられないでしょうへ。」

「確かに、な。」

借りを作ってしまったといつただけが、思考を支配する。

「お弁当。」

「うん？」

「手作り弁当で手を打ちましょう。」

田の前のこ奴は…何を言っている?

突然過ぎて頭が追いつかない。

今日は厄日か、そつか。

「明日、楽しみにしていますよ。」

先程見せた凍り付くような笑みでも、薄ら笑いでもなく、

余裕を持つた、笑顔。

残念なイケメンとはぬじのことをな、きつと。そして笑っていれば、まだ見れる。

…いやいや、そうでなく。

弁当? なにゆえ。

「それで貸し借り無しにしてあげます。」

再び笑つた明智は、やはり悪人面だった。

ぞわぞわ

心臓の辺りが、そう騒ぐのは、気のせいであると思いたい。

気付けば頷いていたけれど、

（全然、格好良くなぞないわ。）

ソルトに悲劇。
(後書き)

続く…かも?

草食系ピネガー。

三成 大谷

学バサ設定。

「刑部。」

どこか遠くから、我を呼ぶ声が聞こえた。

「刑部。」

ああ、また。

「起きる、いつまで寝ていろつもりだ。」

枕にしていた腕を引っ張りあげられ顔をあげる。

呆れ顔の三成が見下ろしていた。

「…あいすまぬ。うとうとしていた。」

「 もうか。帰るだ。」

腕を離され、机の横に掛けて置いた鞄を手に取る。

しとしと

外は雨が降っていた。

ツイていない。今日に限って天気予報を見忘れるなんて。

「 傘を忘れたのか。」

「 ああ、先に帰りやれ。私は雨が止んでから帰りつ。」

「 それだと遅くなる。そこの駅まで歩いて今日は電車で帰るだ。」

特に考えるでもなく、領いて座布団から降りる。

それを鞄に詰めて、三成の傘に入つた。

しとしと

駅に向かうにつれて、脛足は強くなつたよつと思えた。

(残らなくて正解であつたか。)

「刑部、水溜りだ。」

「あい。」

支えられ、更にそんな言葉を掛けられた。

…脛の田へりご頼みのせ、仕方のないことよ。

そつ自分に言い聞かせて水溜りを避けた。

がらむる

車一台がよつやく通れる道を、バスが通つた。

泥水を跳ねさせながら。

道路側に居た三成に、それが少し掛かる。

私はポケットからハンカチを取り出して制服を拭いてやつた。

ぶるるるる

今度は、車だつた。

急いでいるのか、水飛沫を上げながら向かつてくる。

逃げ場は、電柱の影。

民家の壁と、三成に挟まれる。

我の視界は三成で覆われた。

傘に入った時よりも距離が近くて、手を伸ばせば触れられる程。

そして、一人分の白い息が、空気に溶けて見えなくなつた。

しとしと

車は去つた。

それに合わせて、三成も退く。

傘に入り直してまた歩き出す。

距離は、もしかしたら少し遠くなつたかも知れない。

同じ傘に入つておきながら、なぜそつ思つのか、気付いてはいけないような気がした。

近くで遠い。

やつひこひつじるうつじて、駅に着いた。

「空いているな。」

「そのまゝよ。」

電車の中にはまばらにしか居らず、その誰もが椅子に座つて居た。

ぼつぼつ

雨が窓を叩く音が不規則に鳴つた。

とん

肩に何かが乗つて来て、横を向けば三成が我に凭れて眠つていた。

驚きのあまり、声が出ない。

(三成が、寝ている……?)

まともに食つ寝る休むをしない、この男が、寝ている。

すいすいと寝息が頬に掛かり、くすぐつたい。

ふわりと、三成の香りが鼻を掠めると同時に、先程引っ込んだはずの睡魔が我を襲う。

(ならぬ、今我まで寝ては——)

意識は、ぞうりとした沼に引きずり込まれて行つた。

ぴ、ちよん

首筋に冷たい物が落ちて来て、もぞりと体を動かした。

焦点の定まらない目で前を見やれば、銀色が揺れている。

「…」

そこは、もう電車の中ではなく、こつもの帰つ道だった。

恐りく我よつ先に起きたのだらう。

起ひせば起ひて、三成は我を負ふつて歩いている。

(降ひしやれ)

その一言が出てこなさいのは、寝起きで声が上手く出せないせい。

(あつがとう)

礼の一つも言えないのは、言い慣れていないせい。

言ひ訳を並べて、また目を閉じた。

心音が速まつてゐること、元も三成も気付いてゐる。

我が起きてること、知つてゐるのである。

それなりに書かれていますが、この句は、
それが何であるかの問題ではない、

(かのこすれば良いのか)

ソイに蜘蛛の糸。

長曾我部 × 大谷

「最近、寝不足でよくうとうとしていると思ひ。

なぜか。

原因は分かつてゐるのに、それをどうにかする術を知らない。

頬に当たられた手、撫でられた頭、掴んだ腕…

夢にそれらが出て来るせいで、安眠もできない。

ぼんやりと、また目を閉じる。

「大谷。」

「…ん…」

呴かれるのは、甘く柔らかい響き。

「大谷…」

ぬしのせいで、眠れない。

曖昧な声色。嫌われては居ないと思つ。

しかし、本当に特別好かれているかと聞かれれば、そつだと即答もできない。

「まひ、ひま。」

手を伸ばされる。

そう、これのせいで、先一步が踏み出せない。

絶対に自分から触れよつとはしない。

手を、伸ばすだけ…

「ちから求めなれば、それ以上を望まないとでも言つたげに、

紳士ぶつて、素知らぬ顔をして、引きずり込もうとする。

まるで、蜘蛛が巣を張つて獲物を待ち構えるよつ。

触れれば千切れてしまつよつな糸の中へ、どうしたつて千切れない糸を忍ばせて、

がんじがらめにされていく。

それが分かつていても、蝶はまだ逃げられずに、その腕に手を伸ばすしかないのだ。

へりすわード!!。

慶次 大谷 伊達

学バサ設定。

明智が出張でいない保健室。

それだけでそこは地獄から天国へと姿を変えた。

サボリに来る生徒が後を立たないため、見張りとして一人の生徒に白羽の矢が立つた。

大谷吉継

その外見もさることながら、口から吐くのは恐ろしい病名と来れば、

生徒たちはまず近寄れない。

誰だつて自分の余命など聞きたくもないし、やけに説得力があるせいか、

そんな気がしてしまうのだ。

ただの暗示。

だが、それを信じ込ませる術に掛けではザビーにも効かないだろ？

そんな彼のいる保健室に、今日も来客がある。

「ヒ、ヒ…」これはまた、派手にやったものよ。

人の怪我を看てニヤニヤと嬉しそうな顔をするコイツ。

本当に根性ねじ曲がってんなつて想つ。

「shut up! ちょっと打つただけだ。」

「ほう、ちょっと、か？」

頬の辺りに手をやつて、少し強めに撫でられる。

いや、撫でるなんて優しいもんじゃなくて、抓るつて方が正しい。

「いっ…… つてえええ！」

「…にしても、サッカーボールを顔に受けるとはなあ。」

笑ながら田を細めて、まだ俺の顔をペタペタ触りやがる。

「痛ツ！…サッカー部があんなどこで活動してるからな。」

そう、俺は幸村の蹴つたボールを顔面でキャッチした。

それを聞けば、また「イツは「ヒ、ヒ」と楽しげに笑う。

（人に降りかかる不幸がそんなに嬉しいか、人として終わってんだ
ろ）

そう思うのに、だ。

その笑顔を可愛いとか思つてる俺の方が終わってる。

今だつて、顔に手が触れて、もつと触つて欲しいだとか、俺も触
りたいだとか：

そんな事ばかり考えてる。

顔が赤いのは、サッカーボールが当たった、それだけのせいじゃな
い。

「男前が台無しよなあ。」

「う……。」

息を、飲む。

分かつてる。（ただの世辞だ）

それなのに、熱が、心音の速度が、上がる。

「今はイケメンと並ぶのであつたか？」

「……うしぃな。ま、キャーキャー騒がれんのは好きじゃねえ。」

「贅沢者め。」

「アンタは、やつらの無いのか。」

「……と、並ぶと?..」

「女と付き合つたりだと。」

キヨトンと間の抜けた顔をして、すぐに肩を震わせ俯く。

そして、二つの引きつり笑い。

「ヒ、ヒ……ぬし、頭まで打ったか？ひやひつ……く、笑わせ、ふ、

「ふ……！」

「笑い過ぎだな……」

腹を押されてバンバンと俺の肩を叩く。 いでーんだよ、 オイ。

「！」の姿なのでなあ、 ここ寄つてくる女子など無いわ。

「もういいやんか？」

「じゃあその姿勢」と好きになつた俺はびっくりされた。

「あー……じゃ、 もし付き合つたらどんな女が良いんだよ？」

「もしも話か……ふむ。」

特に考えた様子もない。 が、 いつかはかなり重要な話だ。

ま、 男同士だとそこらの後で考えりゃ良いだろ、 うん。

「… 我を、 好いてくれる者が良い。」

「は？」

「我に好きだと喜んでしまえる奇特な者が良いと喜んだのよ。」

そんなの、今すぐにだつて俺が——

「なら、俺が

ガタリと椅子から立ち上がり、大谷の両肩を掴んだ。

その奥でふわりと動いたカーテンと、人の影。

「ま、えだ……」

「よつ！独眼竜。」

「よつやく起きたか。」

三者三様にそれぞれに言葉を掛けて、俺は氣まずくなつて大谷の肩から手を離した。

「…何か言い掛けていたか？」

「お、俺が探してやるー。」

「は？」

「俺がお前の事好きな奴探してやるってんだよーーー！」

だ。さうして、ひまわりも、おひるねだ。

普段人の恋を応援しまくつてゐるくせに、どうしてこういう時だけ邪魔すんだ、前田の野郎オ・

訳わからんねえ事言つて、部活に戻ると伝えて足早に保健室を出る。

前途多難。

大谷のこと好きな奴なんて、いつそ、

(お前の目の前に居るせ、とか)

いつか絶対言つてやる。

「ははっ！ アイツも熱血だからなあ、意外と本気で探してくれるか

「妙な奴よ。」

もしけなこぞ。」

吉継の後ろに立つて、肩に顎と両腕を乗せてダラコと脱力する。

「重い。」

悪いな、独眼竜。

お前の恋、今だけは応援してやれねえんだ。

きっとマイシは、本当に好きって言つてくれる奴を好きになるだろうから、

俺は狡いから、

ごめんな。

「好きだ。」

ベヌガード。 (後書き)

強かDGはお好きですか。

出番は抑えまくっています、だつてDGだもの

その割に、出ししゃばり感があるのは気のせいでしょ？

閲覧ありがとうございました。

使いかけシーザーニング置き場。

私 + 大谷

作者が出ています。

季節の果物のお次は調味料の「さしきせそ」

ミソの使い処が可笑しいのは田を瞑つて頂ひ、そう思つて手を止める。

「…一度田まして、大谷さん。」

「ヒヒ…もう気付かれたか。」

いつの間にか携帯の画面に映り込んでいた影に、盛大に頬の筋肉を緩ませる。

「…今日も其処ですか。」

「ああ。私は画面からは出て来られぬよつよ…ぬしの前ではな。」

「…私の?他の人の前には出でないと…?」

そんなファンタジーな世界、聞いてない。何が、私の何が駄目だと
言つんだ。

あれか、襲いそうだからか。

「…普通、じうじう處では、ぬしが此方へ来るものではないのか？」
「確かに、其方へお邪魔したいですが…私がそちらへ入つたところで、

物語りは展開しないんですよ、大谷さん。」

モブとしての役割ならこなせるかもしれないが、

メインとして動けるかと問われれば、否、としか言いようがない。

二次元に入りたいのは山々だ。しかし、入れるとすれば、それはやはり私でないとと思うのであって。

「…ぬし」

「止めて下さい、夢見ていたいんです。」

「…………こちらへ来られないといつのは」

「大谷さん。」

臆病者は、自分の想像にすら、負けてしまうのです。

都合の良いように解釈しようとしても、限度があるのです。

妄想だって、自分を出してしまつと壊れてしまふのです。

「大谷さん、やつぱり私、外からの方が楽しいです。」

「さようか。」

貴方の口には、私を入れたくないのです。

汚い、穢れ、邪な心を見透かされそうで、怖いのです。

「ヒ、ヒ…」

「何が可笑しいんです？」

「自分の創り出した者に、そんな事を思ひぬはどつかしてこね。」

知らないフリをして下さるよ、意地悪ですね。

「臣も承知よ。」

また来てくれますか。

「ぬしが望めば、な。」

待つてますね。

「たまには茶くらこ出してもバチは当たぬぞ~。」

大谷さんに向てられるなら本望です。

「よし、数珠を当ててやる。」

「いづらに来られもしないくせに。」

ボソリと出でしまった本音。

当たられるなら、いつを当ててみやがれってんです。

大谷さんは、それ以上何も喋りません。私の想像が途切れたせいでしょう。

「 我を見ぐびるなよ…？」

シンと鼻を刺すような香りが漂つたのは、氣のせいでしょうか。

使いかけシーザーング置き場。（後書き）

ええ、氣のせいでしようね

私は至つて普通の人です、怪しくないです。

通報とか警察とかお巡りさんとか口へさんとか止めに下さりをお願いします。

そしてリクエスト受け付けてます！

ミルキーから招待状。

黒田 × 大谷

現代転生（記憶無し）によた谷さん。

「いい加減にしやれ。」

助手席に乗るコイツは非常に不愉快そうにそつと言つた。

黒い短髪に褐色肌、服で見えないが所々に巻かれた包帯。

一見すればおめかしのつもりだらうか、

白とクリームを基調とした生地に赤い蝶の刺繡がされた、ふんわりと柔らかそうなカーディガン。

その下には深緑のワンピース。こちらには、まるで蜘蛛の糸のような白い刺繡が目立つ。

首から掛けた懐中時計は胸の辺りでチクタクと時を刻んでいた。

対する自分は、特にめかし込んだ訳でも無く、

いつも通り古びたジーパンにカーキ色のジャケット、インナーはそれに合わせて黄色がかっている。

加えて無精髭と長く垂れ下がった前髪、いつ直らてしまえばなんだ
が、

とても釣り合つてゐるとは思えない。

「すまんね、いつこの事は初めてなんだ。」

「…なんと？」

キヨトンとした表情を浮かべるソイツに、ビリヒタつて逆らえやつ
にない。

相手は中学生だと云うのに、とにかく成人済みの小生が気圧されて
いる。

「女を車に乗せた事がないつて言つてるんだ。」

それを聞けば、もう顔を覗かなくたつてビリになつてゐるか分かる。

唇を噛み締めてふるふると震え、笑いを堪えているんだろう？

ああ、思つた通り、コイツは身をよじつて笑い出した。

だが、それもすぐに止まつてしまつ。…マズイ、な。これは。

笑い飛ばしてくれたのなら、まだ良かつたのだが、コイツは怒るべ

それどころか気が付いてしまった。

「…で、予定は未定と言つて訳か？」

返す言葉もない。普段、知性派知性派と言つて回つて居る割合、こういった事を計画し、

更に実行した事などなかつたものだから、つい俯きがちになる。

「普通、どこの行くとか考えるものではないのか？」

「あー…」

「我に決めるとでも言つのか？」

やれやれ、と盛大に溜息を吐き、じとじとこちらを睨まれる。

なんてこいつだ。少しくらい、考えて来たつて本當は良かつたんだ。

小生だつて、こんなつもつじじゃなかつた。

煮え切らない様子の小生を見て、コイツは何か思つていたよといと口角を持ち上げる。

「のう。」

どこか大人びて、妖艶ささえ伺える声色に、びくつと体を震わせる。

なんて声で人を呼びやがるんだ、小娘のくせにつ……！

けれども、とつぐに「なんだ」と返事はしてしまっていた。

「……」「うーうーうとか、する」とあるであらひ?」

身を乗り出して笑いかける。含み笑いだ。

その笑顔を見て、「ぐり、と生睡を飲み込んだ。

分かつている、分かつてはいるのだが……

それをしてしまえば、本当に取り返しが付かない事になることも、分かつっていた。

気付いているくせに、素知らぬ顔をして首を傾げる。

「なんだ?」

「我に言わせる氣か……?」

次のコイツの言葉だつて、簡単に想像できる。

ああ、そつだよ、小生は臆病者だ。なんとでも言いやがれ。

「身代金よ。」

小さな鞄の中から携帯電話を取りだして、笑顔を貼り付けたまま小生に渡す。

「まずは我の身代金を用意して貰わねばなあ？」

期待感いっぱいに囁かれた言葉。携帯には、あの石田財閥の家紋「大一大万大吉」がある。

震える指先で電話番号を押しながら、

馬鹿なことをしてしまつたつい先程までの小生自身を恨んだ。

(...הנתקן)

ミルキーから招待状。（後書き）

かんべさんリアル手錠コース行ってらっしゃい！

つえでいんぐキャメル。

家康 × 大谷 三成

それは、嫁ぐ前に見た、白痴夢。

白無垢にその身を包み、角隠しで表情は読み取らせない。

それはどこからどう見ても花嫁衣装であつたが、

中身の自分は手弱女には程遠い男だった。

なぜそんなものを着ているのかと言えば、

これから婚礼の儀が行われるから、らしい。

らしい、と言うのは自分は化粧だけして待機せよと言われたため、

それ以上のことを知り得ないからだ。

関ヶ原を回避するため、輿入れする事に落ち着き、

ならば刑部が良いと阿呆を抜かされ、今現在こうなっている。

そこへ、す、と襖が開けられ、正装をした友が姿を見せた。

「刑部、支度は済んだか。」

「 もうひとよ、三成。」

軽く白粉を乗せ、まぶたから田尻にかけて薄桃色の化粧。

ただ唇の紅は真紅で、そこだけ浮いていたりよつた。

「 どうやらそれは三成の田尻も留まつたらしく、眉を僅かに顰める。

「 刑部、貴様ならもう少し薄い色の方が良い。」

無言で紅に指をやさすとすれば、手を掴まれ、引き寄せられる。

浮かない顔が間近に迫り、息を飲んだ。

「 遅いぞ、二人とも！ 主役が揃わなくてハラハラしていたんだからな！」

三成の手に引かれた我を見つけた家康が不安げな声色でやつて言つた。

何も今更逃げも隠れもできるわけ無いと言つた。

そして、婚礼の儀が手配通りに進められて行く。

ふと顔を上げたそこには、友の姿があり、

自分と同じ口元の紅が白い肌によく映えていた。

(これで、ちょうどよくなつた)

(さうしてほくれぬのよな)

(それをのぞむか)

(……いな)

//トライアムと衝撃場

本多×大谷 お市+家康

まどりむ意識の中、ワシは緩やかに口を開いた。

夢を見ている気分だ。夢の中で布団に入っているのだから、何やら滑稽な心持ちだった。

ふわふわと水の中、あるいは空にでも浮かんでいるようすで、それでいて、

落ちるところ不安は一切無い。

これは、なんところのだろう。

この空間は――

「忠勝、お前最近どうに行っているんだ?」

ワシに内緒で。

無機質な機械音は、何も答えてはくれなかつたけれど、その田が搖らいだのを見逃さなかつた。

「ははっ…別に怒りのいと申すんじゃない、ただ聞きたいだけなんだ。」

お前が毎晩、誰に会いに行つてゐるのか、を。

意識したつもりはなかつたが、恐ろしくは睨み付けるような顔をしていただろう。

重い口がようやく開いて、ワシに不幸ところの言葉を降らす。

「…大谷…の、元に。」

…さすが刑部、と申しひべきか。まさか、こんな形で友を失いかけるなんて思わなかつた。

どいつ詫かしたんだ?ワシの友を…ワシの絆を裂いたどいつのか、

それが三成との絆を断ち切つた罰だとでも、言いたいのか。

無表情のまま忠勝を見つめて、目を伏せる。

「そりか…分かつた。」

否定でも肯定でもない返事を返す。（そり、ただ、それを認識しただけ）

日も落ちていたが、ワシの足は自然と大阪城へ向かっていた。確かめなければ、確かめなければ…！

「ひかりいろさん。」

鈴の音のような声が、すぐ後ろから聞こえる。

その呼び方をする人は一人しか居ない。

くるりと振り返れば、静かな闇に溶け込むように、第六天魔王の妹、お市が佇んでいた。

「…光色さん。」

「お市殿…」

「ふふ…」んばん、は…」

めいじり、と覚束ない足取りで一歩一歩向かっていった。

その姿に恐怖を感じることはなかつたが、ビルが邪魔をねじしまつたといつ嘆がした。

「……ビルへ行くの……？」

「あ、ああー散歩なんだ。ビルへとこいつは……」

「うむ。」

もつて一度、その柔らかそうな薄桃色の唇が動く。

「うわ……」

「嘘？」

頭の中を覗かれているよつた、心の臓を掴まれているよつた、

ぞわり、

と、後ろで誰かが居る訳でもないのに、無性に振り向きたくなつた。

「……蝶々さんに会いに行くの、ね……？」

「…。」

答える事は、できなかつた。

「ダメよ。」

「…お市殿は、何をどうまで知っているんだ？」

「…市は、何も知らないわ。」

「はは、それじゃ…嘘だろ？。」

びくとも動かない表情で、その口元は「そうね」と続ける。

怖い

これ以上踏み込んでいいないと警報が鳴り響く。

これが魔王と血を分けた者の纏つゝ氣なのかと思えば、妙にじつくり来てしまつ。

「光色さん。」

「なんだ？」

「…蝶々さんから、もひ向も取らないであります、ね…？」

「お市殿、やれや…ワシは、そんな」

「じゅなこと…

市はガマンできなくなつてしまつわ。」「

田の落しあつた影の世界で、それは舞つよひに飛びかかつて来た。

市が ずつと * * れま
市じや 黙田 な の ?

好きよ 一緒に 蝶々さん 市も お側
に 居てあげるのに

泣かないで

幸

「あ

それは、確かにお市の叫び声だった。か細く、すすり泣くような。

ぽんやりと部屋の中を見回す。障子の隙間から光が差し込んでいた。

あの手に襲われた後、誰かが運んでくれたのだろうか。

あの声は、恐るべく市之心の内の一端だつたのだろう。

我慢、していののだな。何も知らないフリをして、ずっと。そして、これからも。

罪悪感 嫉妬 親愛 慕情 執着 嫌悪 切望

それらが一緒にになつた、言ひようのないものに押し潰されそう
な、声。こえ、が。

す、す

廊下の方から布を引きずる音が聞こえた。

慌てて布団に潜り、寝ているふりをしてしまった。

びくびくと脈拍が部屋の外にまで聞こえているんじゃないかと思つ
程、耳に響く。

「…まだ寝ていたか。」

襖を開けて入つて来たのは、自分が会いに行こうとした人物、刑部
だつた。

ワシが寝ているのを見て、安堵するような声を出す。

「ぬしの従者が昨夜慌てて飛んで来おつたわ。あまり心配を掛けさ
すでない。」

枕元に座つて、まるで小さな子供に言い聞かせるように話す。

だが、そんなことよりも（昨日忠勝が来た）ということの方がワ

シにひとつでは重要だつた。

「この男に、どれだけ入れ込んでいいのだ？」

忠勝のことだから、さうと戦になればワシと共に戦つてくれる気がした。

けれど、もし、

「…妙な事を考えたものよ。」

また心の内を見透かされたようで、『わあ、ひ、と田を睨つた。

何も言えない、言いたくない。

布団の中で小さくなつてゐるワシの頭を、骨張つた手が撫でた。

「…。

「…。

何も言わないまま、時間が過ぎていく。

ツンと鼻の奥が痛んで、無意識に唇を噛み締めた。

何も失いたくなかった。

けれど、それは無理だと知った。

自分も奪う側に回っていたこと、

友一人救えないと。

後から後から、言葉の代わりにそれは溢れ出す。

「…家康。」

この間に名を付けるなら、それはきっと、不幸なんだろ？

ああ、だって

(こんなにも、離れたくない)

不知なしシャープ。

伊達 × 大谷

あー…くそ、仕事が終わんねえ。

正直飽きた、だるい。小十郎のバーカ。ばーかかーばー！

「独眼竜、右田の悪口を言つて仕事は減るのか。」

「…いいや、減らねえ。」

「なら、口より手を動かしやれ。」

「…。」一 個聞いて良いか。」

「なんぞ。」

我が物顔で炬燵に寝そべる大谷に、今日一番、いや、今年一番の疑問を投げかける。

「なんでアンタがここに居るんだ…。」

「右田にな、頼まれたのよ。」

「Ah?」

話はこうだった。

俺が仕事から逃げてばかりだから説教をくれてやりたい、でも小十郎は野菜を見たい、

そんでもって野郎共に任せたら言こぐるめられて一緒になつて遊ぶだろう、

誰か代わりに俺の様子を見張る奴が必要だ、

だが猿じや俺の背中を狙いかねない、他にオカン属性は居たか、

大谷

「我とて、狙おうと思えばぬしの背中どこのか首の一ツや二つ。」

非常に面倒くさい、と言いたげにお茶に溜息を吹きかける大谷。

「Hey、それ俺のティーだろ。」

「右目が置いて行つた。」

「俺のじゃねえか！」

「知らぬわ。」

ずすー…

「ああああーーー。」

「やかましい、仕事はどうした、仕事は。」

ぐ、と言葉に詰まり、またしぶしぶと机に向かう。

シヒ・ヒセツ！

足の悪い大谷だ、俺が興持つて逃げれば追いかけられないのは目に見えていた。

が、それを実行できるかと言わればノーダ。

第一、どうして俺が興持つて走り回らなくちゃいけねえんだ。

ブツブツと文句を言いながら仕事を進める。

進まない。

もう一度頑張つてみる。

進まない。

すず
—
:

大谷が茶を啜る。

「だあーつー！」

「今度はなんぞ。」

休憩させてくれ

勝手はしやれ

- Thanks -

「うりと畳に体を転がして天井を見上げる。

木目が俺を嘲笑つてゐるようで、なんだかいつそ泣けて来た。

「独眼竜、これは南蛮の書物か？」

どこから持ち出して来たのやら、俺が単語練習に使った紙の束を大谷が持っていた。

「逆だ、上へやつて読め。」

持ち方を教えてやつたが、読めていんとは思えない。
ふと暇つぶしを思いついた。

「大谷、これどういう意味か分かるか？」

指さしたのは

I love you.

と書かれた一行。

「はて。」

思つた通り首を傾げる大谷を見て緩む口元を慌てて隠した。

よし、これは使える。

「これはな、あいらあびゅ、つて読んで意味は私は貴方が嫌いです、
だ。」

「ほう。」

物珍しそうに目を細める大谷。真剣な顔をして聞いているとい悪い
が、

正直腹の底で大爆笑もんだ。

「あい、うびゅ…」

「ふはっ」

「…なんぞ。」

「い、いや…なんでもねえ…！…」

あの大谷が真顔で I love you って…！

ふるふると肩を震わせつつその様子を見る。

「あいら…？」

「I love you .

「あい、ら…びゅ

「I love you .

「あいりあびゅ

出来る限り俺も真顔でそう返す。

顔が笑つてしまいそうで、頬の筋肉がピクピク痙攣しているのが分かつた。

教えた意味が「私は貴方が嫌いです。」なものだから、

もしかしたら、今後どこかでそれを誰かに叫んでくれるんじゃないかなと淡い期待を胸に抱く。

「独眼竜。」

「お、おう。」

思わず声が裏返りかけた。ヤベエ…

「あいりあびゅ

清々した、といつよつうな笑みを浮かべて、いや、超ドヤ顔で、

大谷はそう言った。

(ものん)

いやキヨンてなんだオイ。

待て待て待て！大谷的には俺の事が嫌いって言つてる訳、だから……？

「 … ? あいらあびゅ 」

反応の無い俺に、聞いていないと勘違いしたのか、

また同じ言葉を繰り返す。

笑いがこみ上げて来て、良いはずなのに……

「 … I love you . 」

出て来たのは、同じ言葉。

やべえ、これは、なんか…ヤバイ。

何も知らない相手に言わせているといつ背徳感とでも言つのだらうか、

他にも何か喋らせでみたくて堪らない。

「大谷、次はこの I want to kiss you うてのを」

「政宗さま。」

「「あ」」

なぜか怒られたのは俺だけだった。

2刻近くも正座をさせられて、足の感覚が既に無い。

(Scht...)

(ぬじのお陰で一つ南蛮語を覚えた。暗辺りにでも言つてみるか)

(いやーあれは俺だけに言つとけーな?)

(なにゆえ)

(良こからーー)

不知なしシャープ。（後書き）

落ちなんて、無い。

ストロングへ片思い。

片倉 × 大谷

竜の右田と呼ばれる片倉小十郎が、いつも通り畑にやつて来る。

愛おしげに畑を眺め、そしてウネの中に入つていった。

あれを見ると、舌を打たずにはいられない。

それどころか、いつそあの畑をメチャクチャにしてやりたいとも思つ。

もちろん（しないが）

否、できない。

そんな子供じみた真似が出来る程、単純には行かないものだつた。

抱くはずの無い思い。

それに気付いたのも、やはりあの憎き畑のせいだ。

奥州へ来てから、することもないから畑仕事くらう手伝つてやる、
と声を掛け、

畑を耕す作業を数珠にさせ、その上から我は種を蒔いた。

だが、いぐり触れてないとは言え、土埃は被る。

しかし、

『大谷、砂ついてんぞ。』

そいつ聞いて、なんでもないよつて右田は我的片頬に触れた。

あの田を、一度だが我にも向けた。

愛おしげに、大切なものを扱つよつて。

ずくり、と、体の中心がどじかへ持つて行かれたよつて、酷く混乱した。

(これは、なんぞ)

それを考える度に、それに侵蝕されていくよつて、我は考えることを止めた。

…つもりでいた。

考えたくないとも、勝手に浮かんで来てしまつのだから、これはもう重症だ。

片倉を見て、なぜそんなにも息がじづらくなるのか、不思議でもあ

つたが、

それと同時に、知つてはいけないような気がした。

けれど、己はそれに気付いてしまった。

右田が野菜に微笑めば、我の目も薄く細められ、
右田が溜息を吐けば、どうしたのかと心配になる。

勝手に右田の行動に一喜一憂してしまつようになつていた。

(由々しき事態よ、早になんとかせねば)

そつは思つても、どうにかする術など知らなかつた。

相手は男だと諦めようとした。

そんな時、決まって右田はやつて来るのだ。

『大谷、顔色が悪いぞ、今日はもう休め。』

優しい顔をして、また、あの田を我に向ける。

そりして、結局踏ん切りのつかぬまま、今日に至つた。

今までだつたら、愛おしさに野菜を見つめるその横顔に、我も喜んだものだ。

けれど今は、それを知つてしまつた今は、野菜にすら餅を焼く。

(真正面から、右田の笑顔を拝めるのである。)

我は一度しか、見た事がないのに。

(右田に優しく話しかけて貰えるのである。)

言つておぐが、独眼竜の話しか聞いておりぬか? 我は。

(簡単に触れて貰えるのである)

……葱になりたい。

当の右田せと詠えざ、ただただ愛娘でも見るような温かい田で、
採つた野菜の土を払つていた。

(「ひらりを見よ、右田」)

そう思つても、見るはずなど無い事は、分かつていた。

相手の眼中に入つていないこととも。

けれど、ああ、思いたくなかった。

(葱に負けた……つ)

なんて。

(葱に……ひひ、我は葱以下か、そうか……)

(大谷の奴、もっと一杯食わねえとなあ、骨ばつかだと抱き心地が
悪……今俺は何を……)

考へてゐるのは互いの事なのこ、それは云わりそうにない。

ストロングへ片思い。（後書き）

あれです、大谷さんは大谷 片倉 野菜
だと思ってます。実際は大谷 片倉
です、多分。：葱になりたい。
片倉

寝ぼすけカフェに愛の手を。

私 + 大谷 + ALL

作者が出ています。

目が覚めたら、どこかで聞いた事のあるような声が響いていた。

Let's party! Ya-ha-!!

やはり、どこかで聞いた事がある。

「天、
霸、
絕槍！！」

うむ、どう考へても聞いた事がある。

「…どうこういとなの。」

色んな意味でお世話になつてゐる武将たちが素晴らしい戦いを繰り広げていた。

頭の中がぼぼぼぼーん、した。

いや、まで、可笑しいだろ？。『ひつじ』ことだ。

待て待て、と誰もそこに居ないのに手で制すようなポーズを取る。

待て、頼むから待ってくれ、訳が分からぬいよ！

「気に入らなかつたか？」

「いや、気に入るも何も——大谷さん。」

「やれ、もつと驚いてみせ。」

「驚きまくつてんじやあじやすでゅふふ」

「…そのようよ。」

衝撃的過ぎて、ニヤけ顔のまま顔が固まる。

にたあ、と触手に負けず劣らず気持ちの悪い目を向けていたと思つ。

だつて目の前に大谷さんが居るんだよ？

じっくりなめ回すような目で見ていたら、非常に憐れなものを見る
ような目をされた。

「つまり……」「うう」とよ。ぬしをこいつへ呼せりとした結果、

訳の分からぬ化け物まで着いて来てしまったとこいつとよ。」

「…私のせい?」

「はて……」

私のせいか、そうか。

でも大谷さんと対話してゐる「うつ……

生きてて良かつた!一万歳!—ひやつほつ!

ぐつ、と大きくガツツポーズをし、ふいと横にいる大谷さんを見た
ら、見事に消えていた。

「なぜじやああああ!—!」

黒田さん並に叫んでキョロキョロと辺りを見回す。

右・触手に絡まれてる伊達ちゃん。

左・触手を口に突っ込まれてる真田くん。

前・触手に手足を掴まれ、とんでもないポーズの石田くん。

後・触手を殴つてうつかりそのまま腕を巻き込まれ、なんかの液体で服を溶かされてる徳川くん。

「…………大谷すわああん！――」

「H e y! 無視すんじゃねえ――」

「知つた事か！」

「……ひ、非道でいざれる……」

「ざ、斬滅う……んあ……」

「三成……うあつ、七八に入つて、ひやうう――？」

「大谷すわああああん！――」

あられもない格好の武将たちは確かに、大変美味しい。

だがしかし、私は大谷さんを見つけないといけないんだ。

ここまで来て触手×大谷さんを見ないで帰るなんて選択肢は全くない。

「――――――よ……」「――――――」

頭上で声がしたので、顔を上げるとやうに屈た。

「G」

大谷さんは見事に片手と両足を触手に絡み取られ、それを避けようとした片手がじたじた動いていた。

うねりうねりとのたうつ触手は、ぬるりとした体液を分泌させ、

それは大谷さんの包帯をゆりくつと溶かしていく。

真上に屈るとやや影が掛かるので、少しだけ離れて見る。

「……絶景……」

「ひ、あ……やめ、やめやれ、離れやつ……ぐ、うの……ふあつ……ひ、
や、や……」

蠢く触手の内の一つが、ぱつくつと口を開いて大谷の胸の突起に吸い付いた。

じゅるるる

「な、何をし…つい…?ひや、める、ひ、ひにつ…うあ!」

頭上から、もう少し下へ、地上1メートル辺りで翻られる大谷さん。

途切れ途切れに切なげな声が漏れ、ふるり、と腰が揺れたのを見逃さなかつた。

「ぐ、

思わず、生睡を飲み込む。

(これ、は)

予想以上に、私が限界だ。

「見てな、で…も、止め…ふ、うん…つあ」

「「」ぬ、なぞ…ちょ、無いのに勃ちそ…」

「氣色の悪い事を言うでないつ…!」

「うえ、あ、すんませ…!」

「前屈みになるな!」

もつ少し見てみたい気もしたが、大谷さんに嫌われそうなので止めておいた。

(変態は紳士である)

「…で、この触手はどうしたら消えるんでしょうな。」

誰に聞くでもなくゆるく首を傾げれば、地の底から響くよつた声が聞こえた。

「力を貸してやるわ。」

「第六天魔王…さん。」

「信長と呼べ。」

「の、信長…さん。」

「…是非も無し。」

このお人、なんで居るんだかわ。いや、好きだか。おじさん大好きだけれど。

その後、松永さんの爆弾をお借りし、風魔くんにそれを仕掛けても
らい、

信長さんの合戦で爆発させた。

この辺りは美味しいことはあまりなかつたので割愛する。

爆発されると、幾千もの触手を束ねていた花のようなものがびたん、
と音を立てて地面に倒れ、

その衝撃が他の爆弾に振動を伝え、一次災害でえらいことになつた。

触手に絡まれ、身動きが取れず終いだつた武将たちはそれ天高く投げ飛ばされ、

それぞれの従者、主、仲間、友、捨て駒が受け止めようとして待ち構えている形となつた。

ひゅるる

風を切る音がして、上を見上げると何人もの武将がそれぞれ勝手に何かを叫びつつ降ってきている。

武将が降る。

これは、どこの天気予報でも予報し得ない事だらう。

「うおやかたさぶあああーー！」

人一倍けたたましい声を上げていた真田くんは、なぜか下で待ち構えていたお館さまに殴られて

綺麗な放物線を描き、どこかへ消えた。

伊達ちゃんは小十郎を下敷きに着地し、石田くんは本多さんに家康と共に助けられ、

黒田さんはそのまま誰も手を貸す事無く地面に落ちた。

大きな円状の穴がぽつかりとどまでも続いている。

奥の方から小さく「なぜ、じゃ……あ」と聞こえたが、聞こえないふりをした。

… で、大谷さんはどじだ。

もしかしたら念力で飛んでいるから助けなんていらないんだろうか。

でもいつかて手を出していたらラップのシーのようにふわり

とやつて来たりして。

人が降つてきたり多分「」つして受け止めるだろつ、と両手を出してみた。

そして、本当に人が降つて來た。

「さあやはあつ……」

やつて來た衝撃は、ふわり、なんて生やさしいものではなくて、腕が持つて行かれそうになるものだつた。

びりびりと腕が指の先までしごれているのが分かる。

生まれたての子鹿のように足を震わせ、それでも落とさなかつたのは、

「……ぬ、し……か……」

相手が大谷さんだつたから。

つまり、私の腕は大谷さんを抱えている訳で…

(横抱き?お姫様抱っこ?お姫様だっこしてるよ?ねえねえ)

腕の痛みは吹っ飛んでいた。恐らく頭の螺子も数本どころか飛んで行つたに違いない。

「お…」

「お?」

「…お帰りなさい。」

そう言つので、精一杯だった。

降ろしもしないで、そのままひいと腕の檻の中に閉じ込めた。

「貴様アツー!刑部から離れろー!」

「シーツ…三成、騒ぐと見つかるだろー!」

「もう見つかってんだろ、お前らのせいで。」

「は、破廉恥で!やれるああ…!」

主人公たちが瓦礫の山から「ちりを伺つてゐる。

「お取り込み中なんで後にしてもらえるかな!」

くわつ、と勢いをつけて言い切れば彼らは少し黙ってくれた。

「大谷さん。」

「…あー。」

「酷い目に遭わせて、『めんなさい…』

想像よりも軽くて、それは多分大谷さんが少し浮いてくれているお陰なのだろうと思った。

ずっと会いたかった人に、今、こうして何の『褒美かは知らないが抱き締めている。

「…降ろしやれ。」

「もうちょっと。」

黙つて私に抱き締められている大谷さんは、その包帯だらけの手で、

私の頭を少しだけ撫でた。

「もう戻れ。」

「…あい、分かつた。」

最後に大谷さんの口調を真似してやれば、目が少し丸く開かれ、薄く細められた。

「大谷さん、大好きですーー！」

押しの一手、という訳ではなかったのだけれど、むぎゅ、と腕に力を込めた。

「…私は」

「起きなさいって言つてるでしょー！」

「…なんて良いところで邪魔してくれるんだ……」

田が覚めたら、そこはいつも通り自分の部屋で、抱き締めているのは抱き枕だった。

騒がしく聞こえていたのは、どうやら母の声らしい。

本当に、マンガかと思うようなタイミングで邪魔してくれた。

人が良い夢見てたってのに…チッ

何かを言いかけていた大谷さん。

それが何なのかは分からぬけれど、とりあえず今日も頑張つてみようかな、という気になった。

携帯を開けば、画面の中で不適に微笑む大谷さんに笑みを返して、ベッドから降りた。

寝ぼすけカフュに愛の手を。（後書き）

えー、これ、実は11／22日の朝に見た本当の夢なんですね、ほぼ実話です。夢なので飛び飛びになってしまいますが、こんな感じの夢でした。

あと、これは我流なのですが、自分の好きな作品やキャラの夢を見る方法を、一応書いておきます。

効果は人それぞれだとは思いますが、私は高確率で見ていてます。
まず、自分が起きなければいけない2～3時間前に一度起きて下さ
い。

その後、好きなキャラ等を思い浮かべて一度寝して下さい。

以上です。

明け方に見る夢は覚えてるので、この方法で何度もトリップ気分
を味わえますよ。

虫籠ダージリン。

毛利×大谷

地下牢の奥の奥の間に、それは幽閉されていた。

どれほど之間、そこに閉じ込められているのかなど、

日の光も月の光も届かぬ部屋では数えることは出来ない。

そこへ近寄る事を許されたものは、ただの一人も居ない。

また、それを世話するものも。

だが、それに会いに行く者は居た。

しかし、それ、がどれだけ泣き叫ぼうと、許しを請おうと、それ、は外へは出られないのだ。

運悪く捕まつてしまつた蝶は、弄ばれて、羽をむしられ、

一本ずつ足を引き千切られていく他ない。

それを所有する飼い主が飽いて捨てるか、死んで捨てられるかするまで…

「なんと滑稽な……」

薄暗い蠅燭の灯が、ぼり、と浮かび上がる中、それは言葉を発した。

否、それ、ではなく、大谷吉継が。

滑稽と笑ったのは、自分を蝶に例え、この牢を虫籠に例え、そして自分を捕らえた人物を飼い主と例えたからだった。

拷問される訳でもなく、ただ閉じ込められたまま。

無性に笑えて来る、と痩せこけた類をより窪ませて引きつり、嗤いつ。

「ひ、ひ……ひひ……」

もつ笑うしかない、と氣が狂つたよつて振る舞つても見せた。

しかし、一向に出して貰える気配はなかつた。

ならば、何をすれば出して貰えるのかとも問つてみた。

何もせずに、そこに居ると言つ。

一体、何がしたいのかさっぱり分からない、こんなことに意味はある

るのか。

その問い合わせには、答えはやつて来なかつた。

そんな大谷の耳に、カツカツと言ひ足音が届く。

(今宵も来たか)

すう、と皿を細めて顔を上げた。

「…毛利。」

「まだくたばつてはおらぬようだな、大谷。」

「…出して、くれやれ。」

「ならぬ。」

なにゆえ、

と、大谷の口が動く前に、毛利はその細い体を蹴り飛ばす。

それを正面から腹に受け、壁に叩きつけられた大谷は「あぐー」と小さく悲鳴を上げた。

ひゅうひゅう、と喉の奥から息が漏れ出すよつた音がして、

大谷はその場につづくまつたまま意識を手放そうとする。

「せういえば、石田が死んだぞ。」

しかしそれは、その一言で叶わぬ事となつた。

「み、つ……なり……？」

「ああ、死んだ。」

淡々とそつ告げる毛利の顔には、表情らしきものは何も見えない。

対する大谷はと言えど、目を見開いてカタカタと震える腕で尚も腹を庇つていた。

「へ、…」

「嘘ではないぞ。」

口ぶりからは嘘を吐いているよつては思えない。

しかし、毛利のことだ。また自分をからかっているのではないだろうか。

そんな思いが脳裏をよぎる。

「うん？ 確か死んだのはもつと前だつたか。」

「…な」

「ああ、そうだ。貴様をここへ入れてすぐにだつたな、忘れていた。」

形の良い唇が薄く弧を描く。

「三成、三成…みつ、な…」

「貴様でも泣くのか、意外だな。」

「三成…つ」

大谷の口は、それしか知らないように三成の名を呼び続ける。

毛利はそれが気に入らないとでも言いたげに、微笑みを崩して再度大谷に近寄った。

「…や、いや…来るな、…ひ、…」

乾いてひび割れた頬には涙がこぼれ落ち、パキリと肌が割れる。

「大谷。」

「嫌、だれか…みつなり…みつ」

いやいや、と子供が駄々をこねるよつに首を横に振る姿を見て、毛利は立ち止まる。

ふと何かを思いついたように牢から出て行ってしまった。

やや離れたところで牢の扉が開けられる音がし、

程なくしてずるずると何かを引きずる音がこちらへ近づいて来た。

帰つて来た毛利がその手に引きずっていたものは、豊臣の兵だった。

「お、た…にや、ま…げふつ…」

「喋つて良いと言つた覚えは無いんだ。」

自分と同じく毛利に蹴り飛ばされる男は、助けてくれ、とその手に涙を溜めて大谷を見る。

しかし、その目に映るのは「みつなり」としか繰り返さない人形の
よつな男だった。

「良いか、大谷。よく見ている。」

しゃらん、

と太刀を抜き、その刃を光らせ何の躊躇もなく兵に振り下ろす。

「た、たすげつ」

兵がそれ以上何かを言つより早く太刀を鞘へと収め、あっけなく床
に倒れたそれを見る。

返り血を浴びたにも関わらず特に気にもしないと言つた風で大谷の
横の蠅燭を手に取つた。

その火を、今し方事切れた兵の顔へ、と――

じわ、じゅ、

薄皮を炙り、黒くくすぶつしていく顔、見るも無惨な姿になつていく
兵を前に、

大谷は三成の名を呼ぶことをついに止めた。

その姿が、その炎られた顔が己の顔と重なつて、目を逸らせない。

「今……大谷は死んだ。」

顔を焼き切られた兵を踏みつけ、毛利はそう言葉を吐いた。

「も、うり……」

「大谷は死んだのだ。」

その兵を大谷として世間から大谷吉継を葬り去る気なのだろうか。

大谷は堪らず疑問を投げかける。

「なら、……ならば」

「私は、何だと言つのだ……」

「ぬしの前に居る私は、いつたい」

「大谷吉継で無ければ」

「何だと」

もう誰も兵に目をかけるものは居なかつた。

牢の奥で縮こまつていた大谷は、ずるり、とその足を引きずつて床を這い、

毛利の前へと出て來た。

その目は既に泣いてはおらず、白と黒の反転した目で毛利を射貫く。

「貴様は、我が居なくては生きていけぬ蝶よ。」

名も帰る場所も奪い、もはやその体ではどこへも行けまい？

我の腕の中でしか生きられないのだ。

毛利は優しく語りかけるように言って、大谷に手を伸ばした。

「貴様はもう、我しか選べないのだ。」

どうにも不器用で、捕らえることでしか手に入れたと思えない。

悲しいことに、それは手に入れたはずのものを壊すことしかない。

しかしそれにも、気付けない。

だから、虫籠に囚われた蝶が、再び空を舞ひことは無いのだ。

(愛し方など)

(知らぬ)

アッサムの初恋。（前書き）

色々と不味いです。

アッサムの初恋。

三成×大谷 家康

それは、開けてはいけなかつたのだ。

気がついたときにはもう走り出していく、キーンと高い耳鳴りが鼓膜を揺らしていた。

苦しい。（胸が、）締め付けられる。

耳にこびりついた嬌声。

三成の肩越しに見えた、あの虚ろな目と、かつちつて目が合つてしまつた。

『ひ、あ……あ、……つ……』

滑稽な程にひくひくと震える身体を三成が下から突き上げる。

じゅ、ぢゅ、

と水音が絶えず響いて、耳を塞ぎたくなつた。

べりゅう

いつそう高く突き上げられ、刑部は「ああっ！」と悲鳴とも喘ぎ越えともつかぬ声を上げる。

三成の膝の上に乗せられた刑部はだらしなく開いた口からとろりと涎を垂らし、

見るな、と言いたげに首を横に振つてワシを見た。

『は…っ 刑部、何を考えている。』

刑部の視線に気付き、三成が振り返る。

——それに見つかる前に、ワシは走り出していく。

血室に戻つた途端、残っていた理性は吹つ飛んだ。

早く楽になりたい一心に下だけ脱いだ。

はち切れそつな程になつた自身を掴み、ただ擦り上げる。

気持ちが良いとか、そんな事を考へてる余裕なんて無かつた。

ずっと、好きだった。

憎まれ口しか叩かないよつなフリをして、本当は誰よりも豊臣のみんなを好きなお前が。

ワシは三成が羨ましくて、三成になりたくて、

『 ハハ、相変わらず三成と喧嘩をしてると聞いたが。』

あの声でワシに話しかけていた刑部は、

『 や、ひ、ああ……ひやめ、も、はいり、な……』

同じ声で歸へんだな。

「…は、つ…刑部、刑部…」

すぐ、と下半身が痺れ左手には白濁した欲がべつとりとこびり付いていた。

つ、と冷たいものが頬を伝つて、ぽたりと床に落ちる。

「…刑部。」

人としての欲に溺れる者ではないと、どこかで思つていた。

(けれど)

その両腕は、三成の首に回されていた。

恍惚とした表情さえ浮かべて、切なげにその名を呼んだ。

「刑部

あれは、刑部ではない別の者だと思つたかった。

それと同時に、あの刑部の身体を暴いたのは自分だとも思つたかった。

「刑部」

空氣に晒され、固まつたある白濁したものを見つめる。

それに塗れて自分の名を呼ぶ刑部を想像していたつもりが、

黒てる時に見たのは、いつも通りどこか悪巧みをするような笑顔で

『徳川』

そつ呼ぶ刑部だった。

耳鳴りは、まだ止まない。

アッサムの初恋。（後書き）

初めてやつちやいましたが、大丈夫でしたか？
もうやめて！私のライフは〇よ！

なんて方がいらっしゃった場合には、報告下さい。
消します！！

とこりかこれ…消される可能性のが高いですね

リクエスト1（前書き）

フランキーさんからのリクエスト
P a n d o r a H e a r t s
より、
ブレイク×レイム

リクエスト1

「つの、バカ！！」

振りかぶった手を机に叩きつければ、ハラハラと数枚の書類が落ちた。

どれもこれも全て、ブレイクの仕事だ。

あいつ、目が見えなくなつたのを良いことに

今まで溜め込んできたのも押し付けているんじゃないや……？

ふと脳裏を過つた考えは、恐らく間違つてはいないだらう。

なぜなら、今ちょうど拾い上げた書類には、半年以上前の日付があつたから。

「~~~~ツツ！？バカか！！」

「さつきから、そればかりですね。」

棒付きキャンディを口に含んだザクスが、机の下から這い出でた。

「マイショ、つと。」

「…まさか、ずっとそこには居たのか？」

「マサカ。君が諦めて出て行くのを待つて居たんでス。」

ふう、やれやれ、ヒ肩を竦めてみせるザーグシーズ。

だが、ここは私の部屋だ。

「…邪魔でもしに来たのか。」

眉を顰めると、盛大に溜息を吐くザーグシーズが目に入った。

「バカは君の方ですね。」

思い切り鼻で笑われ、文句の一つか一つか二つか三つを十へいくつも言いつてやるうと近寄ると

ふわりと甘い匂いがした。

けれど、それは、今さつきブレイクが舐めていた棒付きキャンディとは違う香だった。

「…カツブケーキ？」

「よく、分かりましたネ。」

パチクリ、と目を瞬かせるブレイクは、バツが悪そつに紙袋を背中の方に隠す。

「…休憩しよう。」

「ハイ？」

「お茶にすると言ったんだ。」

(どうせそのつもりで来たんだろう?)

日も落ちて、どう考えたってティータイムには間に合っていないけれど、

私たちは書類を放り出してテラスに出た。

「良い香りです!」

私の淹れた紅茶を緩んだ表情のザーサイズが見つめる。

「カップケーキは？」

「もつ食べちゃこませしタ。」

「嘘だな。」

「…美味しくあつません田。」

「食べてから決めれば良」とだりう。」

妙だ。

お気に入りのお菓子を持つてくる奴ではないし、

そもそも「で出るお菓子に不味いものはないはず。

「…手作り…いや、まさか。」

流石に無いだろうと首を振りつつザーサークシーズを見れば、目を逸らされる。

「…え。」

「食べたきや食べれば良こテシコウ…」

カップケーキの一つを思いつき口に突っ込まれ、むせ返る。

「ぐふあつ、ん、ぶ…ざくふ、…。」

中に入っていた生クリームが舌の上でとろけ、喉の奥に滑り落ちる。

「じく…ん

私は口を、ザーサイズは手をクリームまみれにして、騒がしいお茶会が始まった。

「…美味しい。」

「お世辞は結構テス。」

「人がせつかく褒めてるのに…！」

「褒めて欲しいなんて言いましタつけ？」

ふん、とそっぽを向くザーサイズ。その手にはカップが包まれていて、

傷付いた指先を温めているようだった。

切り傷か何か、更に軽めの火傷と打撲。

カツプケーキを作るのに払った犠牲は、どうやら少くないらしい。
分かり辛いけれど、恐らくは私を休ませに来ててくれたんだろう、
そう思うとなんだか笑えて来た。

だつて、あの、ザーサークシーズが手作りカツプケーキを持って私の部屋に来るなんて。

「どうしたんだテス？」「ヤーヤアして。」

「なつ、ニヤニヤなんてしていなー！それより、クリームが付いて
いるだ。」

ひょい、とザーサークシーズの口元のクリームを指で掬い取る。

「あー、ダメテス。」

私の手を取り、ザーサークシーズはそう言った。

ぱくつ

何が、と口を開く頃には、私の指はクリームだと奴の口の中。

「な、…」

頭が追いつかない。

(ザクスが私の指を、舐め…てる?)

さう、とした舌の感触に、ようやく我に返る。

「…ザークシーズ貴様ッ！！」

腕を思い切り引いているのに、全く動かない。

指から伝わるザークシーズの舌は、やけに熱っぽかったような気がする。

クリームを舐め終えたザークシーズが、ようやく口から私の指を解放した。

と、指先にキスをして、

「『』馳走サマ。」

「ば、バカザクス！！」

「俺は何も見ていない、俺は何も見ていない、俺は——」

「やあ、ギルくん。……何を、見たんデス？」

茶会も過ぎた真夜中、ギルバートの悲鳴が響き渡つたといつ。

(オズを探してただけなのにー)

リクエスト1（後書き）

このように、リクエストして貰えれば、大体書きます。

して下さいな。 m (ーー) m

リクエスト2（前書き）

フランキーちゃんからのリクエスト

君と僕。

より、

祐希と黙

リクエスト2

やつぱり、慣れない。

香水、化粧、制汗スプレー？

もう、吐き飛ばす。

「悠太、むり……。」

「分かった、行つといで。」

ゆるく頭を撫でられてから、悠太の肩から頭をビク、反対方向に歩き出す。

向かうは、屋上。

「なんで居るの。」

「お前じゃ。」

開け放つた扉の向こうは、自分を歓迎していなかった。

給水塔の上、お気に入りの場所にはメガネが居る。

「酔つた。」

「へえ。」

「要センセ、サボリ?」

「誰が先生だ、誰が。」

要の横に真後ろに座つて、椅子代わつて寄り掛かつてやつた。

「…おい。」

「サボつてたつて、言わないから。」

これくらい良いでしょ、と思い切り体重を掛けてやつた。

ぐえ、なんて潰れたカエルみたいな声が聞こえたけど、気にしてあげない。

すう、と息を吸い込んで、空を仰べ。

「…寝んなよ。」

そよぐ風が、前髪をなぞつた。

ガチャ

「一」

誰かが、屋上にやつて来たらしい。

(誰だね…)

」つそり覗けば、春と千鶴だった。

声を掛けようとした要を止める。

(なんだ?)

(サボつてゐるの、バレるよ)

ジェスチャーで会話をし、仕方なく一人を見守る。

「…あー のせつ、春ひや そ、ゆひたんの！」と咲ちゃん。

「ふえひー…え、え、ん、それは好きだね…」

「じゅあゆひやーは？」

「す、好きだよー。」

「なんだありや。」

「良かつたね、要の！」とも好きだつて。」

一人のやつ取りは、あと何回か続いて、よひやへ

「じゅあ、メリーは？」

その質問に至つた。

(過去形でしょ)

「膝、貸して。」

春が何かを言つ前に、要の腰辺りを捕らえてそのままうつ伏せになる。

仰向けだと眩しいから。

「は？ おい、なんで「静かに。」

お腹を枕にしてるから、脚が少し邪魔だった。

「…お休み。」

文句なんて聞こえません。

千鶴には悪いけど、まだ今は進展して欲しくない。

このままが好きだから、もう少しだけ、知らないフリをさせて。

俺以外は気付かなくて良い。

特に要は。

くつつけようとしないだから。

だから、さつきの二人のことば、世間話で済ませておいて。

いつの間にか、春と千鶴は屋上からいなくなつていた。

「…つたく。」

一定のリズムで上下する肩。

毎日顔を合わせていても、寝顔はそれなりに貴重だ。

整った顔立ち。

長いまつ毛が、風に揺れる。

「気付いてねーのは、お前もだろ。」

自分の事に関しては、無関心なこのバカは、人の氣も知らないでグース力寝やがつて。

(あ、髪、柔らけ)

給水塔に寄り掛かつて、気付いたのはお昼のちょっと前。

ポケットで振動するケータイを取り上げると、メールが届いていた。

差出人：浅羽 悠太

（件名なし）

20××年11月7日12:40

あげないよ。

「上等。」

ケータイをしまって、祐希を起こす。

(うなぎ屋の)

(こなれいへんひせん、せんせんせんせん)

(ひだりせんせん)

リクエスト2（後書き）

お兄ちゃんの方が隠れ超ブランだと美味しいんですね、はい。

リクエスト③（前書き）

朱雀元さんからのリクエスト
戦国BASARA
より、
元親×政宗

リスト3

「怖えなう、田え騒つてう。」

「…ひ、う」

「…んなこ怖え？」

「てめつ…」

「あ、ズレた。お前がシテ欲しい場所はそこじやねえだろ。」

「や、あ…も、いい…」

「へーきだつて、俺上手いだろ?」

「つめるせ…ト手くわ。」

「泣きそづな顔して強がんなよ。」

「…お前、樂しみでるだろ。」

「ぬう。」

「ピアスの穴開けんのに何十分掛ける気だ、バカ。」

「イベモ。」

「い、あこが、血つらじやね、え…ひつ…あ、あ…」

「ちよつと血イ出たわ、ワリ。」

「て、テイツシユー！」

「ん? 痴めときやしいだろ。」

「だ、だからって本当に痴めんじやねえ…！」

「よつし、キレイにできた。」

「もうテメエには頼まねえからな。」

「なんでだよ、キレイにやつただん?。」

「うわせーー。」

リクエスト3（後書き）

なんぞこれ
書いといてなんだが、

バカは私です。

リクエスト4（前書き）

フランキーさんからのリクエスト
オリジナル設定を頂きました。

鮎川 × 柳

上司と部下。そして、男同事。

付き合うとか、可笑しいんだ。こんなのは。

「おお、さすがに、お前は、お前らのことを、よく知るな。」

ヘラヘラ笑いながら、いつも遅刻すれすれに出社してくるこの人は、

「おせよハジれこめす、鮎川部長。わわわと仕事してやれ。」

僕の恋人、らしい。

「きつびしー！そんな真面目などこも好きだけどー。」

「寝言は寝て言つて下せ、そんなことよつ、仕事です、仕事。」

「仕事と俺、どっちが大事なのさつ！」

よよよ、と口で言こながりしなり、とお姉座りをする。ちなみに、

僕の机だ。

「はあ……仕事してくれる人が大事です。」

「任せで！」

お世辞にも、可愛い台詞なんて吐けない僕。

それでも鮎川さんは、なんとなく分かってくれてるらしい。

ふんふんと鼻歌なんか歌いながら、物凄い速さでキーボードを押していく。

…ですが、部長と言つだけありますね。

「あ、柳くん、専務が呼んでたよ。」

「…。」

「柳くん？」

「…え、あつはい！」

「はは、専務が呼んでたっての言いに来たんだけどねー。」

「すみません、すぐ向かいます。磯貝さん。」

見とれてた、かもしれない。

仕事ぶりに、そう、あくまで仕事ぶりに見とれていたんだ！

悔しくて鮎川さんの居るデスクを見ると、ニヤニヤ笑いながら投げキッスを送られた。

くせつ、こいつか見返してやる…

今は、それよりも呼び出しを受けないと。

…専務が、何の用事なんだね？。

「柳です、失礼します。」

「ああ、来てくれたか…」

誰も居ない倉庫に呼び出されるなんて、僕は何かしてしまったのだろうか。

「やうやくならないで、今日はちょっとお願いをしたくてね。」

「お願い、ですか……？」

白髪交じつなご、どこか若く見える専務は、目を細めて笑った。

「君は、あー…鮎川くんと仲が良かつたよね？」

「い、いえ！そんな」とは…

周りから、そんな風に見られているんだらうか？

僕は一気に緊張した。まさか、まさか…バレているなんて、もしやうだとしたら…

「良いんだよ、上司と部下の仲が良いこと悪いことは、とても好ましいことだ。」

「あ、あいつがどうぞおめでたす。」

良かった。そういうことでの呼び出しではないようだ。

ホ、と安堵の溜息を漏らす。けれど、その吐き出された溜息を、僕はすぐに飲み込む事になる。

「で、頼み事なんだけどね、私の娘と鮎川くん、ちょっとお見合い

でもしてくれないかなあ、と思つてね。」「…く？」

お見合い？誰が？鮎川さん？なんで、僕が居るのに、

「何回かそういう話はしたんだけどねえ、彼、ノッてくれなくてさあ。君からも一回、言つてくれると有り難いんだけど…どう?」

「…。」

鮎川さんが、お見合い…やくゆくは、結婚、とか。

ぐぬぐると頭に浮かぶのは、綺麗な家の庭なんかで、子供たちと楽しげに遊ぶ鮎川さん。

その横には、顔の見えない女人。

「柳くん？」

「は、い…言つてみます。」

「やひ、それは良かつた。それじゃ、もう戻つて良いよ。」

半ば放心状態で職場に戻る。来る前と同じ景色なのに、どこか灰色

がかつてこなよつに見えた。

(お見合このじと、鮎川さんと言わなくひや…)

言いたくない、言いたくない、けど…鮎川さんは、やうした方が、幸せなのかな。

「柳くん、顔色悪いけど…大丈夫?」

「……黒川さん…」

誰かに話しへ聞いて貰いたかったけれど…そんなことしたら、困るのは僕たちだ。

「なんでもないんです。すみません…」

(こんな時、鮎川さんなら)

どうしたら良いのか分からぬ時、いつも浮かんで来るのは鮎川さんだ。

僕は、情けない。

女々しくて、こんな風になりたかった訳じゃないの?。

「……鮎川さん……」

「呼んだ?」

思わず名前を口にしたが、ビックり沸いて出たのか、鮎川さんが田の前にいた。

ただし、まるでオマケみたいにくつこた女性社員と一緒に。

「鮎川さん先輩、さうと邪魔になっちゃってることですよ~。」

「ええっ…? 本当に。鮎川さん…!」

「ほひー、あひに行きましょ~。」

(やめひ、触るな)

僕の、鮎川さん…触らないで。

腕を引く鈴とこの会の女性社員も、されるがままの鮎川さんも見てられなくて、

挨拶もなしにそのまま早足で通り抜けた。

(嫌だ) (嫌だ) (嫌) (いや) (鮎川さん)

汚い、感情。気持ちが悪い。僕ばかり、好き、みたいで。耐えられそうに、無い。

地下の、印刷用のコピー用紙が置いてある個室に、転がり込むようにして入る。

いつの間にか、全速力で走っていた。

じつとりと汗ばんだ手を見つめて、握りしめる。

(怖い)

怖い、鮎川さんが、僕の元から去ることが。

鮎川さんが、結婚する時、僕はきっと、掛ける言葉でどうか、会わせる顔すら、無いだろう。

「…鮎川、さん…」

返事は、帰つて来ない。

振り切つて来たのだから、当然だ。後ろを振り返つても、鮎川

さんは居なかつた。

居ない、居るはずがない、居たつて困る。

こんな顔、見せられない。僕は、声を押し殺して膝を抱えた。

(鮎川さん、鮎川さん)

「呼んだ?」

頭上で声がして、反射で顔を上げれば、息を切らした鮎川さんが、居た。

「…な、んで、」

「呼んだ?テシヨ?あー…疲れた。」

無遠慮に」どや、と僕の横に座って、息を吐ぐ。

「呼び出しの後から、様子がおかしいけど…なんかあつた?」

「…専務の娘さん、と…お見合い、しないんですか?」

睨むように横を見れば、鳩が豆鉄砲食つたよつな顔をしていた。

「……柳ちゅんは、ち……俺がお見合にしてても良いの？」

（じて欲しくない）

そう思つてゐるのに、どうして僕の口は、本当のことだけ言えないんだろ？

「勝手にすれば良いじゃないですか。」

「あ、つや。」

突き放すような言い方で、その声は、とても冷たくて。

僕にだけ好きと言つてくれた鮎川さんだが、どこかへ行つてしまつうな気がして、

気がつけば、僕の手は鮎川さんの手の上に重ねられていた。

「……柳ちゅん。」

「したいなら、すれば良いじゃないですか。」

あつと僕の手は震えている。恥も。

「本當だへ。」

鮎川さんの指が、僕の指に絡む。

「…ッ」

『あや、と握りしめるように手に力を込める。

「言つてくれなきゃ、分かんないよ。』

「嫌だ、お見合になんて、しないで… つお願いしま、あゆかわ、さ

…』

顔と回じで、ぐしゃぐしゃにならばかりの面葉。みつともなに泣き声が、少し響いた。

「ね、柳ちゃん。俺のこと…好き?」

「分かつてゐるくせに、聞くんですか。」

「うふ。」

この人には、きっと一生敵わない。

「…好き、です。大好き、…」

繋いでいた手を引っ張られて、ぼす、と鮎川さんの胸に引き込まれる。

手は繋がつたまま、空いた手で髪を優しく撫でられた。

「…柳ちゃん。」

ゆつくりと顔が近づいてきて、ぎゅう、と口を開く。

ぱちんっ

額に、軽い衝撃と、けたたましい笑い声。

「かつわいー！ふふ、引っかかった。」

「いわゆる、『トロピコン』といへ、トらないもので……僕は引っかかってしまつたらしい。

「もう知りません！」

せっかく勇気を振り絞ったのに、こんな風に茶化されて、腹立たしくて、悲しくなった。

手を振り払つて鮎川さんから顔を離ける。

トントン

肩を叩かれて、苛々しながら振り返る。

「なんですか——」

僕の言葉は、鮎川さんの脣で塞き止められた。

「……引っかかった。」

「ああ、もう、だから…」

(そんなに綺麗に笑わないで)

後日談

社長室には、一つの湯気を上げる「ヒーヒーカップ。

「…で、結局部長くんの言つ通り動いたつて訳かい?」

「社長だって応援してたでしょ?」

「自然の成り行きを見守っていたんだよ。」

「これも必然と思えば良いでしょ?」

社長と呼ばれた男は釈然としない様子で専務を睨み付けた。

「嘘吐きめ。娘なんていないくせに。」

「はいはい。私には貴方だけですよ。」

「…減給してやる。」

「怖い怖い。」

…そんな会話があつたとか。

リクエスト4（後書き）

いつもリクエストありがとうございます、フランキーさん。
もとい、私の友人さん。

「希望には添えましたか？」

閲覧感謝です。

リクエスト5（前書き）

朱雀元さんからのリクエスト
戦国BASARA
より、
佐助×政宗

大将と竜の旦那は自他共に認める好敵手。

蒼紅永劫なんて言われてて、俺様としてはちょっと複雑。

だって、それってさ、俺様の入る隙間がないってことじやん?

大将のオマケみたいにしないでよ。

アンタ、自分が誰の物かもう忘れちまつたの?

「Hey、猿。」

「なに。」

語尾を上げずに、首も傾げずに、ただ見下ろす。

俺似組み敷かれている竜の旦那はとつても不機嫌そうに俺様を睨んでいた。

アンタの、好きだよ。でも、そのじやない。

「句じやねえよ、退け。」

「嫌、って言つたら……？」

「力尽くでも。」

思わずぷつと吹き出してしまった。

それを見て、もひと顔をしかめる竜の田那。

「Ah? 何笑つてやがる。」

「ははっ、やー…」めん、こんなに簡単に押し倒されてるのに、つて思つちやつて。」

ホント、笑つちやつよね。

俺様

こんな、一人の人間に執着するなんて撃破りも良いところ。

元々忍んでないから撃がどうとか言える立場じゃないけど、

それでも、もつと上手く感情を隠せると悟つてた。

正直、むりだわ。

首筋の辺りに顔を埋めて、そのまま動くのを止めた。

血と汗と、硝煙の匂い。死臭。

俺様と、おんなじ。

気がついたら、その真っ白な首もとに噛み付いていた。

ぶつ、と歯が肉を突き破る音がして、真っ赤な鮮血が色を付ける。

赤

朱

紅

「こんな時まで、邪魔しないでよ……」

ねえ、大将。

俺は、アンタの忍だけど、譲れないものだつてあるんだから。

ホント、笑っちゃう。

我を忘れたよう、ただひたすらにその紅を舐めとつて、飲み下す。

その色で竜の口那を染めないで、なんて、馬鹿馬鹿しい。

じへん

舌を這わせるたびにびくりと竜の旦那の体が跳ねた。

かーわいー

満足げにその様子を眺める。

キツと鋭い眼光が俺様を貫く。そう、その目が好きだよ。

アンタが見るのは、俺様だ。

じわり、と紅が滲む程度になつてきたら、そこにロビツける。

鬱血するべしに吸い上げれば、暗赤色を中心に、花が咲く。
この赤なら、嫌いじゃない、かも。

「Stop!...いい加減にしろー」

髪の毛を掴まれて、引き剥がそつと引つ張られる。

つとこ、これで禿げたらアンタのせいだよ。

「そんな顔して言われても、嫌がつてゐるよつとは見えないけど?」

頬を染めて、運動した訳でもないのに息が上がつてゐる。

それを指摘してやれば、口をパクパクとさせで顔を逸らされた。

「ひつひついて。

「つたく…血で盛つてんじやねえよ、猿…」

「竜の旦那もでしょ?」

「ごめんな、と軽く謝りながら週りにすまぬとい、胸ぐらを掴まれて

引き寄せられる。

澄んだ眼が、その中に欲の色を纏しませずに俺様を映す。

「責任取つてけよ?」

「…仰せの如き、つてね。」

リクエスト5（後書き）

サスダテ難しい！

とにかく伊達さんが難しい！

はい、白状します、正直伊達さん苦手です。

グダグダで申し訳無い。

リクエストありがとうございました。

リクエスト6（前書き）

桜耀さんからのリクエスト
戦国BASARA
より、
家康×三成

リクエスト6

学バサ設定。

ふわりと香るのは、イチゴの香り。

甘くて酔つてしまいそう。

放課後、教室内は自分一人だった。皆、部活に行つたり帰宅をしたのだろう。

生徒会の無い私は、家に帰るバスが来るまでの間、ここで時間を潰す。

図書館へ行こうかとも思ったが、今日はやめておいた。

ガラツと扉が開き、けたたましい声と共に誰かが入つて来る。

「宵闇の羽根のかた?はれつー?占いでは確かにここに居るって出たんですが…！」

キヨロキヨロと教室内を一通り見回すのは、一一五の鶴姫だった。

騒がしこと一言文句を言つてやうと立ち上がる。

「あ、石田さん。」

「あ、石田さん、じゃない。ここに風魔は居ない、早急に自分のク
ラスに帰れ。」

「うう…でも確かにここに出てたんですよー。」

「知った事か。」

「さつーもじゅ…」

訝しげな表情で見上げられ、なんだと首を傾げる。

頼むからせつと帰つてくれないだらうか。

私は騒がしい女子のノコトやうこトいけない。

「…窗闇の羽根の方、石田さんにな化けるなんてしてませんよね?」

「馬鹿が貴様は。私はどう見ても私だらう。」

「それはやうなんですが、ちよつと確認させて下さー。」

ぐわし、と両頬を掴まれ、思わず啞然とする。

馬鹿だ、馬鹿が居る。どうにかしないといけない馬鹿が……

ぐごとに縦横斜に引っ張られ、流石に手を叩き落とす。

「むね…せつぱりそれはマスクじゃないんですね。」

「当然だ。

「それにしても、唇が乾燥してカサカサしますよ？」

「余計なお世話だ。」

お邪魔しちやつたお詫びに、これあげます

手提げから取り出したのはまだ開封されていないリップクリーム。

「男がつけるものでも無いだろ」つ

「そのまま放つて唇が切れちゃつても知りませんよ?」

強引に押しつけられ、突き返そうとすれば、既に廊下で手を振つていた。

「では、私は宵闇の羽根の方を探さないといけないので…。」

女といつものは面倒くさい。そして押しのが強い女には関わらない方が良い。

これが今日、私が学んだことだ。

くわ、どうしてんだ、これは…

誰かに押しつける事もできたが、唇がカサついているのは知っていたし、

捨てるのも悪いと思つてしまつた。

一応、周りを見回してから包装を破る。香り付き、とこう文字が真っ二つになつた。

蓋を外してやると、自分の周りにぱこにイチバの匂いが漂い始める。

その甘つたる匂いに顔をしかめつつ、唇にそれをあてがつた。

色も味もつこていないので、匂いだけがひとつへまとわつてしまつて、

すぐにも拭つてしまいたくなつた。

がらつ

再び扉が開き、またあの女かと思つて振り返れば、別の人物が立つていた。

「ああ、やつぱつ！」西園たんだな、三成！

「家康か、何のようだ。」

もう秋も深まってきたといつひつひ、片腕を捲つていて寒くはないのだろうか。

心配している訳ではない。うつされたら嫌だという意味だ。

「？何をブツブツ言つてこるんだ？三成。」

「いや……なんでもない。」

首を横に振つてから緩く傾げる。

「で、何の用だ。」

「一緒に帰るついでに」

「…………許可しない。」

雲行きも怪しくなってきた。

バスで帰るよりも「イイツの自転車の方が早いし、何より代金が掛からない。

自分に言い聞かせて、鞄を持ち隣を抜ける。

ふわり、とまたあの香りが私に合わせて移動した。

「ん？甘い匂いがするな。」

「ああ……さつきリップクリームを塗った。煙草ならやるがいい。」

「良いのか？」

「私が持つていても仕方無いだろう。それに、匂い付きだった。」

「ほい」と無造作に家康の手にそれを置く。

じゃあ遠慮無く、と蓋が開けられ、家康の口に近づいていく。

ふと家康が動きを止めた。

なんだ、やはり要らないのか？

「間接キスだな、三成つ！」

「なッ……馬鹿か貴様は……やはり返せ……！」

「嫌だ、絶対に返さない。」

「イイイエエエヤアスウウ……！」

騒がしく通り過ぎていいく一つの影を、

とある無口な新聞部員がベランダで見送っていたことを、一人は知らない。

後日

「貴様ツ……まだそれを使っているのか！」

「使い切るつもりだ。」

「今すぐに捨てる！斬滅されたいか！」

イチゴの番りがする度に怒声が響き渡ったとか。

(なんなら、ワシが口移しで塗ろうか?)

(イイイエヤヤアスウウ!...)

(ま、ひ、叫ぶから唇が切れた)

(ま、待てッ!)

(許可できないな)

番り一つに反応して、振り返りてしまつ自分が恥ずかしい。

同じ番りだと、ずっと一緒に面るみたい。

近くに居ても、離れていても、必要以上の意識をしてしまへ。

そんなものです。

リクエスト6（後書き）

なんぞこれ。またも、なんぞこれ。
ここで一句。

甘々を 目指したはずが 空回り

桜耀さんリクエストありがとうございました。

リクエスト（前書き）

ちこわいわんじせんからのリクエスト

君と僕。

より、

悠太×春

「…髪、伸びたね。」

何気なく、今日は良い天氣だね、と話すよつこ、やつに言われた。

「え、やつ？」

「うん、伸びた。」

切らなーいの、と暗に言われている気がして、思わず俯く。

前髪を親指と人差指でつまんで、ちよい、と弄る。（そんなに伸びたかなあ？）

前は無理矢理切つたくせに、今になつて強制はしない、なんて、なんだかずるいと僕は思った。

だつて、（だつて？）

だつて、なんだつたんだろ？。

僕は自分の考へてることすら、時々よく分からない。

「…伸ばすの?」

「どうじみつかな。」

「ふうん。」

何が、ふうん、なんだひつ。

だから、悠太くんの考えてる」とは、何一つ分からない。

「…ねえ。」

「うん?」

「切ったげようか。」

「ふえ?」

「髪。」

俺が切つてあげるよ。

と、やひっぱり何でも無こいとのみづてに。

じゃあお願こ、と、ちやんと答えられたか自信がない。

ただ、掌は汗びっしょりになつて、顔がとつても熱かつた。

(髪を切る、だけ)

それだけの事なのに、何を緊張するつて言つんだらう。

しょきり、しょき、

軽くなつた癖毛が、くるりと丸まつて新聞紙を置いた床にぱさりと落ちる。

薄く目を開いてそれを見下ろす。(くるくる)

部屋には、僕と悠太くんしか居なくて、僕は椅子に座つて、悠太くんが本当の美容師さんみたいに髪を切ってくれている。

服に付かないよつて、と自作のビニールカバーを肩に掛け、じつとする。

「田、瞑つて。」

「あ、うん。」

前髪に手を掛けていたから、きつと前髪を切るんだね。

ちり、と見えた真剣そつな田口じゅうとした。

しょせ、しょせ

鋸の刃が髪を裂いて、重なり合つ音だけが聞こえる。

真つ暗な中、悠太くんがどんな顔をしてるのか、気になつた。

何を考えて、いつしてくるんだろう。

ただ、見ていて鬱陶しいから切つただけ……かな？

しょせん。

「髪落とすから、まだ開けないでね。」

「うん。」

後ろ髪、両耳の付け根、つむじ。

手がさらさらと髪の毛を梳いていく。撫でられているみたいで、なんだかくすぐったい。

前髪に手が掛かつて、同じように指と指の間に髪の毛が通つていく。顔にいくつか付いてしまったらしく、悠太くんの手が頬の辺りを撫でた。

そのまま、動かない。

(もしかして、失敗しちゃったのかな…)

坊主頭にされた自分を想像して、思わず小さく息を飲んだ。

悠太くんは、頬にやつていた手をまた前髪に戻して、オールバックにするように持ち上げた。

ふにゅり

指の腹とは違つ、もっと、柔らかい感触が、額に落ちてきた。

「終わったよ。」

「え、あ、うん。」

何よりも無かつたかのように、落ちた髪の毛を新聞紙と一緒に丸めている悠太くん。

わらわのは、なんだつたのかな。

分からぬことだらけの中で、一つ分かるのは、悠太くんの耳がちよつと赤かつたこと。

胸がどきどきしちゃうのも、悠太くんを見て苦しくなりやうのも、
どうしてなのか（誰か教えて）

リクエスト7（後書き）

なんでしょうね、これ

キミボクは書いていて非常に楽しいですが、
期待に添えられる出来ではないです、はい。
リクエストありがとうございました。

リクエスト8（前書き）

ちこわいわんじさんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

佐助×伊達

田那と一戦交えに、今、竜の田那が甲斐まで来ている。

俺様は程々のところ止めなきゃなんないから、木の枝に逆さにじぶら下がつて見物つて訳。

「飽きもせず、よくやるよね…右田の田那もそり思わない?」

「政宗さまにはもう少し大人になって頂きたいものだ。だが…」

「だが?」

「真田の、あいつの前だけで子供みてえにほしゃいでんだ、多田に見るさ。」

「…右田の田那つてば、おつとなー…」

田那の前だけ、ね。なんかムカつく。

それに、俺様はそりは思えない。本当に子供みたいなんだよね、竜の田那つてさ。

そのうち田那に飽きて別の処に行くんじやないか、って時々思つ。

好敵手なんてのは名ばかりなんじゃないか、って。

「猿飛。」

「なに?」

「殺氣くらう隠せ。」

「…はは、」めん、つい。

「言つておぐが政宗さまの背中は

「アンタが預かってんでしょう、知ってるよ。」

それに、これは殺氣とは違うんだよねー…

なんていうか、旦那じゃなくて俺様が竜の旦那の好敵手なら良かつたのになあ、って、

羨ましいのかもなあ…真っ向からぶつかってける相手が居るってのが。

大きく溜息を吐いて地面に降り立つ。

ぶら下がってたせいか、頭に血が上ったみたい。

くぢ、と脳みそが揺ゆぶられたよつな氣きがして少しふりつく。

あ、でもそろそろ止めなきや。旦那の動きが少し鈍い。

俺様は槍と刀を交えてる一人の間に手裏剣を投げた。

「はー、しゃーりょーーー！」

ぱん、ぱんっ

と軽く手を叩いて声を掛けた。

「Ah? まだ終わってねえぜ。」

「佐助えつーなぜ止めたーー！」

「はいはい、旦那たち、仲が良いのは分かつたけどーー もう夕餉の
刻だよ?」

夕餉、と一言言えば旦那の口付きが変わるのが分かった。

あー…ホントに食欲旺盛なことだ…

「帰るぞ佐助えつ！！！」

「はいなーい！」

手をひざりひざりとやる気なく竜の日那たちに振つて背を向ける。

「Hey、俺はまだ満足してねえぞ?」

「なんなら俺様が夜の相手でもしましょうか？」

やれやれ、と振り返つて竜の旦那の胸倉を掴んで引き寄せる。まるでこれから接吻でも交わすくらいの距離。

「アーティスト」

はんつ、と鼻で笑われて流石にちょっとムカついてきた。

「腰が立たなくなると思こますけどお？」

「OK、好むにしやが——」

竜の曰那がそれ以上何かを言つ前に右田の曰那の無言の鉄拳と、

「破廉恥で！」ぞうりあーーーの怒声と拳が飛んで来た。

「ちよ、田那、まじ、くるしつ……」

「首！ねえ首に入ってる！！ちよつとおつ！！」

「政宗さま、何度も何度も言つよつですが、こゝは甲斐なのですぞ」

「だからどうした、俺は好きなように」

政治をまー!!

Sorry.

(てか、こんだけ分かりやすく反応してんだから気付け猿！！)

(あーもー…ホントうぐづつさひべさひべしなむまで色々じてせりつか
と思ひかけたじやん)

(ああ)

(俺様つてば)

((なんて厄介な相手に惚れたんだらうー。))

リクエスト8（後書き）

どこかすれ違う一人を書きたくて…

失敗しました

おおふ、だから伊達ちやんは苦手だと書つたのでは？」

リクエストありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874x/>

ロークアットは二度笑う。

2011年11月27日13時54分発行